素浪人　青龍～Blue Dragon【第１章】『稼業への扉』

頼光　雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
素浪人　青龍～Ｂｌｕｅ　Ｄｒａｇｏｎ【第１章】『稼業への扉』

【Ｎコード】
Ｎ４５４６Ｄ

【作者名】
頼光　雅

【あらすじ】
出会い系サイトで出会った菜穂美と始めた副業。これが、新たな世界への入口に。自他共に認めるヘタレ「マサ」の運命は？燻っていた何かに火がつき、止まっていた歯車が大きく動き始める。そして、新たな扉が音を立てて開いていく。

第1話「出会い、それは？」（前書き）

お子様向けではありません。
また、官能小説でもありません。

個人で運送屋をしていた俺。
先細りする仕事・・・
出会い系サイトで出会った女
菜穂美から持ちかけられた仕事
を始めることになった。
しかし、それは裏の仕事だった。

第1話「出会い、それは？」

第1節

菜穂美との出会い、そして・・・

「あかん、ムチャ眠い・・・」

連日の副業で、俺は睡魔と必死で戦っていた。

小さいながら自分の軽トラで運送屋を営んでいた俺。

家電量販店赤井電機の下請でＰＣの配達とセットアップを請け負っていた。

それまで２ｔ車で普通に家電配達と設置をしていたのだけれど体力的に少々キツくなっていた。

正直言って、４０歳の声を聞くと自分の体はそろそろ悲鳴を上げ始める。

そんな時、自分の特技が生かせるＰＣのセットアップの仕事が新たに舞い込んできた。

仕事の単価も高く楽である。

これはとばかりに仕事をスイッチすることにした。

最初のうちは仕事量もあり収入もそこそこに上がっていたものだったが・・・。

しかし、世の常。
段々と参入してくる者が増えるに
従い待機時間が長くなってきた。
そうなると、フルコミッションの
下請けは辛い。
たちまち収入減となるのだ。
これは誰も保証はしてくれない。
かと言って、以前の家電配達には
戻ることはできなかった。

ある時、出会い系サイトで知り合
った菜穂美から連絡があった。
菜穂美は大きな声では言えないが
筋金入りのシャブ中だった。

「（♀）ハマちゃんさぁ運送屋やっ
てるやろ？」
「ああ。
それがどないしたん？」
「（♀）営業ナンバーなん？」
「当たり前やろが。
モグリで真っ当な仕事はでけへ
んて（笑）」
「（♀）今度な、うち品物捌くこと
にしてん」
「なんや、俺に配達せぇ言うんか
いっ」
「（♀）ピンポ～ン
一回５０００円払うからやって
くれへんかなぁ？」

俺は冗談半分に・・・

「勤務時間は？
一日どれくらい上がりあんねん？」

「（♀）そやねぇ。
今までコソコソやってたから？
何やけどな、４～５万は固いと思うねん。
そのかし、時間は夜やけどな」

俺は少しだけ言葉に力を込めた。

「ふ～ん。
ほいで、俺に何運べて？」

「（♀）決まってるやん。
し・な・も・の」

「ふーん、わかった。
中身は知らんことにしてやったるわ。
詳しい打合せしょうか？
いつもんとこで２０時に待ってるわ」

「（♀）オッケ～。
あんた時間はいっつも２４時間制やな」

・・・一戦交えた後の気だるさの中、俺は腹ばいのまま煙草に火を

つけて煙を吐き出した。

「（♀）ハマちゃんは、やってみよと思たことないん？」

豊かな胸を布団で隠し、菜穂美が呟いた。

「あふぉ～。
俺はまだ人間やめとないわ」
「（♀）うち、人間やめてへんで。
（笑）」

全く変な時に変なことを言う女やで。

「（♀）ほな、ビジネスの話しょうか？」

俺は吹き出した。
今の今まで俺の腹の下でのたうち回っていた女の口からビジネスと言う言葉が出てくるとは思わなかった。

「（♀）宛名書いた封書渡すから～
指定の場所へ届けて２万円受け取って、わたしにくれる？
そしたら、その場で５０００円渡すから」

「わぁった。
一回ずつかいや？
めんどいな～」
「（♀）ハマちゃんを信用してない
わけやないけど、うちかて卸元
に金払わんとアカンねん。
その辺、察してぇなぁ」
「おっしゃ、わぁった」
「（♀）もし、途中で検問会うても
営業ナンバーやし２４時間メッ
センジャー言うことやったら止
められることもあれへんと思う
ねん」
「リスクは、こっちゃで回避せえ
言うこっちゃな？」
「（♀）さっすが、ハマちゃん。
察しがエエわ～。
早速今晩からやってくれる？」
「をいをい。
人使いの荒いやっちゃなぁ。
ええよ～
Ｌｉｋｅ　ａ　Ｋａｉｂｕｔｓｕ　Ｆｕｒａｎｃｈｅｎ
やったるわ」
「（♀）よっしゃあ
商談成立。
ほな、もっぱつ（もう一発）し
てくれへん？」
「かぁっ
この好きもんがぁ」

と、言いつつも人格のない下半身は・・・

シャブをやっている女の反応は凄まじいものがある。
菜穂美曰く、全身が快感を感じて総毛立つと言う。
俺は女性遍歴が豊富な方ではないが、女がここまで乱れるところは見たことがなかった（と思う）。

「○●△▲□■▽▼」

意味不明の言葉を口走り、やがて菜穂美は絶頂に達したようだ。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第2話「メッセンジャーサービス」（前書き）

第1章第2話
「メッセンジャーサービス」

菜穂美から頼まれて始めた副業。
（・・・お子ちゃまには、相応しくない
内容です）

第2話「メッセンジャーサービス」

第2話
「メッセンジャーサービス」

千日前通りを谷町9丁目で折れ、
谷町筋に入る。
うん？
谷町5丁目を右折して、はあ？
そんなビルあんのんか？
あ、ほんまにあった。

俺は、ハザードを出して左に寄り
車を停めた。
わかっちゃいるけど少し緊張。
何せ、運ぶものが運ぶもので
ある。
ああ、オートロックかいな。

ピンポ～ン

チャイムの音がやたら大きく
響く。
時間は深夜1時にかかる頃で
ある。

「はい」
若い女の不機嫌な声が答える。

「夜分に恐れ入ります。
メッセンジャーサービスです。
代引きのお荷物です」

女の声が突然嬉し気なものに
変わった。

「待ってましたぁ。（^―^）
どうぞ」

エントランスを潜りエレベーター
に乗る。
え～っと、部屋は？
ああ、あっこか。

深夜のマンションの廊下は静まり
かえり、安全靴の音だけが響く。
なんや、オバQの足音みたいやな
と一人笑ってしまう。
目指す部屋の前。
ドアホンを押す前に扉が開く。
俺は、営業用スマイル一杯に

「代引き金額２万円です」

と言いながら封書を女の手に
渡した。

「はい。

じゃ、これ」

もう、何で二つ折りで隠すように札渡すねん。
と、思いながらも

「ありがとうございました。
領収書は出ませんがよろしいですか？」

俺は頓珍漢なことを言った。

「ああ、いらないです」
「ありがとうございました 」

俺は丁寧に頭を下げて女の元を辞した。
車に戻った俺は大きなため息をついた。

「あ、あかん！
ため息ついたら幸せが逃げるんや」

俺は、携帯を手に取った。

「菜穂美？
終わったで。
今、どこや？
わかった」

俺は、シフトをローに入れ、車をスタートさせた。

「ほい。
これ集金した金な」
「（♀）ほな、５０００円な。
でな、ハマちゃん。
頼みあんねん」
「なんや、もっぱつ（もう一発）
してくれは堪忍やで。（笑）」
「（♀）何言うてんねん、この
スケベオヤヂ」
「オヤヂ言うても返事せぇへん
言うてるやろ（笑）」
「（♀）お金、入れに行かなあかん
ねん。
乗してってくれへん？」
「はいはい。
ほんまに人使いの荒いやっちゃ
なぁ。
乗りいや」
「（♀）サンキュ。
せやからハマちゃん好きやぁ。
ｃｈｕ！」
車の中で、俺は菜穂美に訊いた。
「なぁ。

俺、一応赤井電機の配達してんのや。
明日も仕事あるしな。
俺はいつ、どこで寝たらええねん？」
「（♀）しょうむないこと言いなやぁ。
せやから、あんたもやってみぃて。
2、3日寝んでも飲まず食わずでも平気の平左やから」
「ボケぇ、しばくぞ。？
俺はまだ人間やめとない言うとるやろぉが」
「（♀）ふ～ん。変なとこ真面目やねんから。」
「ほっとけっ、あふぉ！？
人間誰かて信念があるんぢゃ。
その先どっちや？」
「（♀）あ、右曲がって」

俺は、急ブレーキを踏んだ。

「あふぉ。
進入禁止やないか。
こっから遠いんか？」
「（♀）２００ｍくらいかなぁ？」
「ほな、ここで待っとくから行ってこいや」

「（♀）イヤや。
なんでそんな冷たいこと言う
のん？」

菜穂美は、頬をプッと膨らませて
拗ねるように言った。
こんな仕草に俺は弱い。

「よっしゃ。
ほな、しゃあないな」

俺は周りに人通りのないことを
確認して乱暴にギアをバックに
入れた。

「（♀）ちょお、ハマちゃん。
進入禁止言うたやん」
「やかましぃ！
黙っとけ！」

俺は、バックで道を逆走して
いった。

「（♀）え〝え〝え？！
こんなんありなん？」

よう言うで、この女。
俺が弱い仕草、知っとって言う
とる。

「奥の手や。
誰にも言うなよ。
おぉ、この辺か？」
「（♀）あ、ここで止まって。
ちょぉ、金払いに行ってくる
から」
「おぉ、ほな帰るで。
お疲れ。」
「（♀）ちょぉ、待ってえやぁ。
また、そんな冷たいこと言う
しぃ～」
「わぁった、わぁった。
そないに拗ねなや。
待っといたるから」
「（♀）うん。（満面の笑）
すぐ戻ってくるから待っといて
やぁ」

俺は、オンナの可愛い仕草に
負けて待っているしかなかった。
なんや？
携帯が鳴っとる。
は？
菜穂美やないか？

「（♀）ハマちゃ～ん？
堪忍、もう二つほど頼まれて
くれへん？」
「怒るで、しかし。（笑）

ｂｙ Ｙａｓｕｓｈｉ Ｙｏｋｏｙａｍａ.

ほんま人使いの荒いやっちゃなぁ。
わぁったわい」
「（♀）堪忍な。
今度は、うちも横乗ってくさかい。」

「（やれやれ、人使い荒い女に惚れてしもたもんや）」

「（♀）なんか、聞こえたで。
フフフ」

え゛！　口に出したつもりはなかったんやが・・・

「今度は、どこや？」
「（♀）阿倍野筋出てくれる？
道、言うから」

深夜の阿倍野筋をツーショットかいな。
惚れたオンナと二人連れ。
それも、悪ないか。
しかし、寝る時間をうまいこと確保せんとこれはマジ危ないなと考えているうちに菜穂美が戻ってきた。

「（♀）お待ち～。

ほな、お願いっ」

俺は、うなずいて車をスタートさせた。

「（♀）うちの世話になってる
お姉さんのとこやねん」

訊きもしないのに菜穂美が話だした。

考えてみたら普段、菜穂美が何をして食っていて、どこに住んでいるか知らなかった。

俺は、ふと訊いてみた。

「なぁ。
おまえやぁ、普段何して食ってんねん？
家、どこやねん？」

「（♀）・・・」

ん？

何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのか？

沈黙が続く。

「すまん。
訊いたらあかんこと訊いてしもたみたいやな。
堪忍やで」

「（♀）・・・かまへん。
いつかは言わなあかんと思てるけど」
「言いたないことは、言わんでエエねんぞ。
日本国憲法でそう定められとるんやから」

※日本国憲法第三十八条
【不利益な供述の強要禁止、自白の証拠能力】
1
何人も、自己に不利益な供述を強要されない。

・・・ちょっと、違うかなぁ？

「（♀）プッ。
そんな大げさなもんとちゃうって」

菜穂美は少しだけ機嫌を直したようだ。

「（♀）あ！
その先のマンション。
ここでエエわ。
もう一つんとこはお姉さんと行くからエエよ」
「ほな、ここでええねんな。

今度こそ帰るで」
「（♀）おおきにぃ。
明日から、またお願いしても
いいですか？」
「何、改まっとんねん。
惚れた弱みや。
かまへんで」
「（♀）よかったぁ。
ほな、これ。
あと二回のお手当。
明日また、８時頃連絡くれる？
仕事用意しとくから」

今度は、封筒に入ったものを
俺に渡した。

「１０－４。
２０時過ぎに電話するわぁ。」
「（♀）ほんまにハマちゃんは、
２４時間制やね。（笑）」

菜穂美がマンションに入って
いったのを確認して俺は車を
スタートさせた。
まあ、あんだけの時間と手間で
１万５千円やったら楽でエエな。
信号待ちの時、俺は封筒を開けて
みた。

「？？？？？？」

1万円札と一緒に白い粉の入った
ビニール袋と注射器が・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第2話「メッセンジャーサービス」（後書き）

運命の歯車が動き始めました。

第3話「夫婦漫才？」（前書き）

いつの間にやら、危ない道に・・・

第3話「夫婦漫才？」

「ほんまに睡眠不足はお肌に大敵
やなぁ」

今日は、3件こなしただけで赤井
電機の仕事は終わってしまった。
２０時までかなり時間があるので
一眠りしよう。
荷台へ入って毛布にくるまる。
・・・　爆睡

ああ、携帯が鳴っとる？
誰の携帯や？
おっと俺の携帯やないか。
何時や？
寝ぼけ眼で腕時計を見ると１８時
２０分。
よ～寝たなぁ。
おっと、携帯や。

「（♀）ハマちゃ～ん、おはよ。
そろそろ起きんとアカンで」
「おお。
ようわかったなぁ、寝てるて」
「（♀）ふふん。
あんたの行動、よんでんねん」
ん？

なんか、声がステレオで聞こえる
やないか？
なんじゃ、こりゃぁ？！
ｂｙ　Ｙｕｓａｋｕ　Ｍａｔｓｕｄａ.

「サンキュ、モーニングコール
してくれて。
今、どこや？」
「（♀）寝惚けてんと、はよぉ
荷台から出ておいで」

荷台から出てみると車の脇に
菜穂美が立っていた。

「おまぇ、よ～ここがわかった
のぉ」

俺は心底驚いた。

「（♀）あんたの行動よんでる
言うたやろ。
晩飯奢って」
「それにしても・・・」
「（♀）種明かししたらな・・・
ハマちゃん前うちに話して
くれたやん。
それ覚えとってん。
それとな、２時間ほど前に
いっぺん電話してんで」

あわてて携帯を見る。
確かに不在着信があった。

「すまん。
爆睡しとって気ぃつかなんだ。
堪忍やで。」
「（♀）そんなん、気にして
へん。
ああ。
こらぁ、仕事あぶれてどこぞで
寝とるな？と思うやんか。
いつもの場所っちゅうのを思い
出したから来てみたんや。
そしたら、おるおる。
荷台覗いたら丸まって寝てる
やん。
キャハハハ」
「くそぉ。
別れた嫁ハン以外の女に寝顔
見られてもうた。
くやしい・・・」
「（♀）アホなこと言うてんと。
早ぉ、晩飯行こうや」

タバコに火をつけて煙を吸い込み
車に乗り込んだ。

「（♀）何、食いに行くのん？」
「おまえなぁ。
オナゴやったら、晩飯とか

食いに行くとか言うなぁ！
アホ！」

ボケとツッコミをしつつ車を
スタートさせ国道１号線に入る。

「せやけど、ようまぁこないな
とこまで来れたのぉ」
「（♀）へへへ。
ハマちゃん知らんやろぉ？」
「何がぁ？」
「（♀）ドコモのイマドコ言う
やつ。」
「あの位置情報サービス言うやつ
かい？
知っとるけど？
あ〝っ！」
「（♀）ウフフ。
やっと、わかったみたやね」

うれしそうに菜穂美が笑った。
やられた。
知らぬうちに菜穂美に登録されて
いたようや。
そう言えば菜穂美の携帯もドコモ
９０ｘシリーズだった。

「（♀）うちぃ、焼き肉食いたい
わぁ」
「食いたいとか言うな言うとる

やろが。
ほんまに、金のかかるオナゴ
ぢゃのぉ。」
「（♀）誰も鶴橋の鶴一行こうて
言うてへんやん。（笑）」
「言うとるがな。
しゃあないな、惚れた弱みや。
行こか」
「（♀）やったぁ。
言うてみるもんや」

してやられっぱなしだ・・・。

「そうや。
こるらぁ！
菜穂美。？？」
「（♀）なんやのんなぁ、急に」

俺は、昨日受け取った封筒を
菜穂美の鼻先に突きつけ言った。

「おまえなぁ、こんなもん俺に
渡すな。
今度こないなことしたらシバキ
まわすどぉ」
「（♀）いやん、堪忍。
怒らんといて。
うるうる」
「何がうるうるぢゃ！？
ほんまに・・・。

おまえは、さとう珠緒かっ！」

あかん、本気で怒っていない
俺がいる。
そんな、俺の心内を見透かしてか

「（♀）堪忍。
もうせぇへんから」

と、うつむき気味に言った。

「早ぉ、なおしとけ。
デコピンに見つかったら手が
後ろに回るわぁ。
この年で塀の中に行きとない
での」

菜穂美は慌てて封筒をバッグの
中にしまった。

「ほな、鶴一行こか。
車止めるとこあるかのぉ」
「（♀）知り合いのお姉さんおる
からそこに置かせてもろたら
ええわ」

俺たちの乗った車は、一路京橋を
経て鶴橋へ向かって行った。

第４話「菜穂美の正体・・・」（前書き）

「いつかは、言わなあかんと思てる・・・」
そのいつかが到来。
菜穂美の正体とは？

第４話「菜穂美の正体・・・」

俺の二足わらじの生活は、問題が発生することもなく淡々と過ぎていった。
季節も移りそろそろ上着を着ていると暑くなり始めた初夏のことだった。
この頃になると俺も副業の方にも慣れ、一度に2，3カ所まわってと言うことができるようになってきた。

この日も、いつものように3カ所目が終わり、菜穂美に電話した。

「3つ、終わったで。
次、どないすんねん？」
「（♀）ハマちゃん、晩飯まだやろ？
晩飯がてらつき合うてほしいとこあんねん」
「相も変わらず、その言葉遣いは直らんのぉ。
どこ行くねん？
鶴一は堪忍やで」
「（♀）あふぉ。
ほな１１時に新歌舞伎座の前で拾てくれる？」

「１０－４（テン・フォー）。
２３時に新歌舞伎座な。
晩でも駐禁うるさいから早よ
来てや」
「（♀）うん、わかった。
着いたら携帯鳴らして」

なんや、今日はどこ行こ言うの
やろ？

時間通り、２３時に菜穂美を
ピックアップした。

「（♀）お姉さんがね、晩飯
どうしても一緒にって言いはん
ねん」
「へぇ～。
そらエエけど突然どないしたん
や？
で、どこ行くねん？」
「（♀）大国町」
「なんや、すぐやんか」

気のせいか、菜穂美は落ち着きが
ないように思えた。

「（♀）あ、次の角左曲がって。
このマンション。
ここ路駐しても大丈夫やから」

俺は、車を停めてエンジンを
切った。
オートロックではないが一応
小綺麗なマンションである。
入って右側にあるエレベーターに
乗る。
菜穂美は8のボタンを押して
言った。

「（♀）ここの家主さんやねん、
お姉さんの旦那さん」

普段と違う緊張した声だった。

「ふ～ん」

初めてくるマンションだ。
8階は、1室だけ。

「でかっ！」

ついて出た言葉はそれだった。
黒髪のロングヘアーのお姉さんが

「いらっしゃい、どうぞ」

と笑顔で扉を開けてくれた。
俺は、なんと挨拶していいのか
戸惑ったが、かろうじて

「初めまして」

と言うことができた。
菜穂美の緊張が伝染ってきたのかもしれない。
入ったリビングには、寿司やオードブルが並びシャンパンがバケットで冷えていた。
そして部屋の真ん中に恰幅のよい少し目つきの鋭い紳士が立っていた。

「やぁ、浜田さんですね。
遅くにお呼びだてして申し訳ない。
どうぞおかけ下さい」

バリトンのよく通る声が俺の耳に届いた。
菜穂美が緊張しているのが判る。

「菜穂美の助(すけ)をして
いただいて助かってますよ。
まあ、どうぞ」

と、シャンパンを勧められた。

「いや、車ですので」

と言いつつその鋭い目に射すくめられるようにグラスを受け取る。

「大丈夫ですよ。
すぐ醒めますよ。
さあ、どうぞ」

と、注がれるともはや遠慮は無用だった。

「さあ、どうぞ召し上がって
下さい」

寿司もオードブルも腹が減っていたのかすごく美味しく感じた。
その紳士が口を開いた。

「申し遅れました。
金山修二と申します。
菜穂美とは異母兄弟なんですよ。
よろしくお頼み申します」
「はっ。
こちらこそよろしくお願い申し
上げます」

何を言ってるんや俺。
なぜこんなに緊張するのかが、
しばらくしてわかった。
この金山なる紳士、顔は笑って

いるが目が笑っていなかった。

「ところで、浜田さん」

唐突に話は切り出されて俺は、
飛び上がった。

「浜田さんは、独身でらっしゃいましたよね？
単刀直入にお伺いします。
菜穂美のことはどう思ってらっしゃいます？
いや、母が違うと言っても
菜穂美とは兄と妹。
妹に好きな人ができたと言われたらねぇ」

初めて金山は、本当に微笑んだ。
俺の頭の中は一瞬にして真っ白になった。
想定外の成り行きに俺は言葉を失ってしまった。
横で菜穂美が緊張が解けたように可愛い舌を出した。

「（♀）ごめんね、ハマちゃん。
驚かせて」

金山が続けて言った。

「菜穂美はねぇ、シャブ絶ちを
しよったんですよ」

金山は自分のことのように照れ
ながら続けた。

「それでね、浜田さんさえ異存が
なければ、そのぉ菜穂美を
もらっていただけないかと」

え？
え？
何それ？
どう言うこと？

「この通りお頼み申します。」

金山は深々と頭を下げた。
俺は固まってしまった。
想定外の成り行きに追い打ちを
かけるように金山は言った。

「一緒になっていただけたら
シマ内の一つをお任せしても
いいんですよ。
いやいや、お返事は近々に
いただけたらいいですよ。
これ、菜穂美。
浜田さんにお注ぎしなさい」
「（♀）どうぞ、浜田さん」

菜穂美がにこやかに促す。
震える手でグラスを受け取る
俺だった。

「それでは、浜田さんのご健康と
よいお返事を期待して。
乾杯！」

金山の目は、もう笑っていな
かった。
それどころかこの話を断ったら
命の危険を感じるような殺気が
光線のように俺の顔に注がれたの
だった。
横で菜穂美がニコニコしながら
怖いことを言ってくれた。

「いつか話すて言うてたんはな、
兄貴のことやってん。
うちの兄貴、稼業張ってるから
なかなか言い出せんで・・・」

そう言われて、金山の手を見た。
指は１０本とも揃っている。
と、言うことは稼業を大過なく
勤めてきたと言うことだろうか？
袖口から色鮮やかな我慢（刺し
もの／刺青）が覗く。
金山が何かを言いかけたが、俺は

その言葉を最後まで聞くことなく
・・・

気を失ってしまった・・・。

第5話「そして、俺は途方に暮れる・・・・」（前書き）

菜穂美に惚れてしまった、俺は・・・

第5話「そして、俺は途方に暮れる・・・」

「???」

目の前に映ったのは、菜穂美の豊かな胸だった。

「（♀）やっと、お目覚めぇ？
ええ加減、足が痺れてきたとこやったわぁ」

俺はソファの上で菜穂美の膝を枕に横たわっていたようである。
あわてて俺は飛び起きた。

「今、何時や？」
「（♀）ふふふ。
お目覚めの第一声がそれ？
2時を少しまわったとこやで」

かぁぁぁ！
俺は不覚にも1時間あまり意識を失っていたようだ。

「菜穂美の兄さんのオーラに圧倒されたわぁ・・・」

話には聞いたことがあるがホンマもんの稼業の方に接するのは

生まれて初めてである。
なんぼ突っ張ってても俺はド素人
やと言うことが身に染みてよく
わかった。
唐突にソファの後ろから声が
した。

「おお、浜田はん。
どないしはったかと思いました
で」

うわっ！
後ろにおった。
俺は、またまた頭が真っ白に
なった。

「す、すんません。
お見苦しいところを見せてしも
て」

かろうじて出てきた言葉がこれで
あった。

「元々、ノミの心臓に毛が生えた
ヘタレなもんで」
「がはは。
オモロいこと言う人やなぁ。
稼業張るより芸人になりはった
方がエエかもしれんなぁ。
おお、そや勝手なことして

申し訳なかったけど、うちの
若いもんの服と着替えさして
もらいましたで。
倒れはった拍子に思い切り
シャンパン浴びはったよって
ねぇ」

い〝っ？
そう言えば俺の作業服がすっかり
脱がされてスゥエット姿になって
るやないか。
ぼそっと金山が言った。

「浜田はん。
あんた見かけによらず派手な
下着でんな。
気に入りましたで」

げっ！
風神雷神の猿股（トランクスとも
言う）を見られてしもた。

「（♀）むふふ、兄ちゃん。
ハマちゃんベティちゃんの
パンツも履きよんねんで」

こらっ、余計なこと言うな。

「がはは、ますます浜田はん
のこと気に入りましたで。

まあ、なんもありませんけど
今日は泊まって行きなはれ。
大丈夫、菜穂美も横について
ますさかい。
心配せんでも覗いたりしまへん
から。
がははははは・・」
「あかん、まな板ｏｎ　ｔｈｅ　ｃａｒｐ
や」

その言葉を聞いて皆、大笑いに
なった。

しかし、俺は一つ気になっている
ことがあった。
もしかして、チビっていたのでは
ないか？
誰も何も言わないが気になって
しようがなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

こうして、「ノミの心臓に毛が
生えたヘタレ」の俺は金山家の
居候となった。
元々、小市民であった俺。
今更部屋住みして修行と言う
根性もないと言うことを見抜かれ
居候と言う身分に落ち着いた。
とは言え、金山家の妹の旦那で

ある。
若い衆は「さんづけ」で俺を呼ぶようになった。
しかし、門前の小僧である。
見ていると自然に稼業の仕来りが身に付いてくるものであった。

俺の本名は、浜田雅美。
字面だけを見ると女のようで嫌なので滅多なことで人前ではフルネームを名乗らない。
義兄は、俺のことを「マサ」と呼ぶようになった。

「（♀）なぁなぁ。
うち、あんたのことなんて呼ぼか考えててん」
「何を今更、ハマちゃんでなし。あんたでエエがな」
「（♀）いや！これ大事なことや（妙に力が入る）」

またまた、いらんこと考えとるなこいつ。
うわっ、きたで～。

「（♀）うん、決めた。
これからは、『だ～りん』と呼ぼ」

ほらぁ、来よった。
俺は多少の照れを含んで答えた。

「そらかまへんけど、なんや
ラムちゃんみたいやで」
「（♀）そやで。
いらんこと考えたら電撃やでぇ
（笑）」

うわっ、こいつ笑てるけどなんぞ
あったら血の雨降るな。

「ほな、俺もこれからおまえの
こと『はに～』と　呼ぼかな？
（照れ照れ）」
「（♀）いや～ん。
むっちゃ嬉しいわぁ、だ～りん
・・・うるうる」
「何がうるうるや。
おまえは、さとう珠緒かぁ！」

ん？
なんか、このネタ前に出てきたな
・・・。

こうして菜穂美との夫婦漫才の
ような新しい生活が始まった。
夫婦とは言え、年の差が２０歳。
しかし、俺は菜穂美の尻に敷か
れっぱなしであった。

出会いは、不純だったが惚れた
弱み。
しゃ～ないか・・・。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第6話「そして、本当の家族として」（前書き）

ふとしたきっかけで知り合い一緒になったマサと菜穂美。ヘタレのマサから稼業人マサへと一歩を踏み出していきます。

第6話「そして、本当の家族として」

第６話
「そして、本当の家族として」

赤井電機の仕事は、辞めたが
メッセンジャーの仕事は続けて
いる。
昼間が暇になったが、いつも
菜穂美と乳繰りあっていても
しようがない。
俺は一念発起して剛柔流湊町道場
の門を叩くことにした。
話は、義兄の方からつけてもらう
ことになった。
今までにも、死んだ親父の伝で
旭真会に通っていたことがあった
が２０代の頃の話である。

「剛柔流湊町道場」は、稼業の
若い衆も通う実戦フルコンタクト
空手と拳法をミックスした大変に
厳しい道場である。
義兄にも、

「マサよぉ。
　途中でケツ割ったらあかんぞ」

と、釘を刺されたものである。

礼に始まり礼に終わる。
久しぶりの清々しい武道の風に
触れて俺は充実した稽古を送る
ことができた。
昔取った杵柄。
何度か通ううちに眠っていた俺の
中の獣が、目を覚まし始めたよう
だ。

「（♀）だ～りん。
最近すごくマッチョになって
きたやん。
フフフ、惚れ惚れするぅ。
（スリスリ）」

以前と違い髪も短くし、若い衆の
ような頭にしている俺に菜穂美は
ご満悦のようだった。

義兄も、

「これやったら、ヘタレも直に
卒業やのぉ。
ガハハハハ」

と安心したようであった。

「マサよぉ。
おまえ、菜穂美と新婚旅行も
行ってへんやないか。

たまには、遠出してこいや」
と義兄が分厚く膨らんだ財布を
放ってよこしたのは、夏も終わり
そろそろ涼しくなってきた頃で
あった。

「（ひえっ！
何や、突然に）」

それに呼応して菜穂美も、

「（♀）お兄ちゃん、おおき
にぃ～。
ねぇ、だ～りん。
うち、南の島連れてってほしい
なぁ」

何やねん、目に星が出てるやない
か。

「義兄さん。
すんません、気ぃ使てもろて。
せやけど、南の島言うても
ＨａｗａｉｉかＧｕａｍくらいしか思い
つきませんけど」
「おお、Ｇｕａｍや。
Ｇｕａｍ行ってこい。
向こうに兄弟がおるわ。
話つけといたるさかい一月ほど

行ってこいや」
「（♀）わ～い。
だ～りん、行こ行こ。
ついでに向こうで、式も挙げたいなぁ」

俺は、時の流れに流されて肝心なことを何もしていなかったことに改めて気がついた。

「菜穂美、すまん。
俺、おまえに何もしてへんかったな。
よっしゃ。
向こうで二人だけで式、挙げよか。
義兄さん、すんません。
不調法な義弟で」
「おっしゃ、話は決まりや。
ほれ、これチケットと祝儀や。
マサぁ、パスポート持っとるな？」

目も笑っている義兄であった。
い゛っ！
もしかして、また・・・

「Ｏｈ！　Ｎｏ！
まな板　ｏｎ　ｔｈｅ　ｃａｒｐや！」
（一同、爆笑）

（＾Ｏ＾）（＾ｏ＾）（＾Ｏ＾）（＾ｏ＾）（＾Ｏ＾）（＾ｏ＾）

「お～い、美恵！
若い奴らも皆呼んできたれ」
「はいはい。
それとお酒やろ？
菜穂美ちゃん手伝うてくれる？」
「（♀）は～い、お義姉さん」
「マサよぉ、わかっとるな？
おまえは、もう家族やねんぞ。
こら！
男のくせに何、泣いとんねん」
「そんなん言うたかて・・・。
ああ、義兄さんも泣いたはりますやん」
「ぼけぇ！
ほこりが目に入ったんじゃあ。
こるらぁ、美恵！
部屋の掃除ちゃんとやっとかんかい！
マサに、要らんこと言われるやないか！」
「はいはい。
ちゃんとやっときます（笑）」

リビングは、明るい笑い声に包まれた。

いつの間にか、部屋は若い衆で

一杯になった。
その中で一番年かさの坂井が
言った。

「これからは、一同叔父貴と呼ば
せていただきます。
よろしゅうお頼み申し上げ
ます」
「おお、坂井の言うとおりや。
今日、今の今からマサは身内や
からな。
みんな、よろしゅう頼むで」

金山のバリトンが部屋に響き
渡った。

「ほんまにヘタレのわしですが、
よろしゅうお頼み申し上げ
ます」
「くらぁ！
もう己のことヘタレ言うな。
ヘタレは、卒業じゃ」

吹き出した青木が坂井に、張り
倒された。

「坂井さん、坂井さん。
許したってぇな」
「はっ。
叔父貴がそう言われるのでし

たら」
儀式は終わって若い衆も部屋から
出て行った。
義兄が言った。

「マサよぉ。
チケットはオープンになっとる
さかい、いつでも好きな時に
発てるで」
「（♀）あっ！
このチケットファーストクラス
やん。
兄ちゃんおおきにぃ。
るんるん」

あかん。
また、菜穂美に『さとう珠緒』が
降りてきた。

「後は、二人で決めとき。
わしゃ、ちと出かけてくるから
のぉ」

義兄は出かけていった。

俺は部屋に入りＰＣを立ち上げて
Ｇｕａｍ観光局のホームページを
開いた。
後ろに菜穂美が佇む。

「ホテル、どこがエエかいなぁ？
はに～、どこがエエ？」
「（♀）うち、よ～わからんから
だ～りんにお任せ。
うふっ」
あかん。
完全に、『さとう珠緒』になっと
る・・・。

Ｇｕａｍと言えば旧友のマイケルが
いたなぁ。
確か、Ｇｕｎ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｃｌｕｂの
インストラクターしとったなぁ。
Ｍｉｃｈａｅｌ　Ｓｏｕｌ。
確か、そんな名前やった。
Ｇｕａｍに行って初めて実弾撃って、
あんまし頻繁に行くから

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＹＡＭＡＳＨＩＲＯ－ＧＵＭＩ　？」

なんて、言われたなぁ。
突然、ホームパーティーに招かれ
思い切り飲まされたバドを噴水の
ように吹き出したっけ。
思い出が蘇る。

「よっしゃ、アクティビティーの
豊富さでＰ．Ｉ．Ｃ．にしよ。
はに～。

ダイビングしたことあるか？」
「（♀）ない～。
でもぉ、してみた～い。
そこ、チャペルあんの？」
「待て待て。
あかん。
カトリック以外はアカン言うて
書いとる」
「（♀）そしたら、１日だけ
カトリックなるわぁ」
「そないに、都合よぉ行くん
かいな？」

あーだこーだと二人でワイワイ
言いながらプランは決まった。
夕食の時、プリントアウトした
ものを義兄に見せた。

「よっしゃ。
後はやっといたる。
菜穂美、よかったのぉ。
シャブ中やったおまえが一丁前
に花嫁さんや。
マサも逞しゅうなって家族の
一員やしのぉ。
何や？
また、目にゴミ入りよったな」

義兄の目は潤んでいた。
強面の義兄であるが、意外と涙

もろいようだ。
後ろから菜穂美が抱きついてきた。
台所では美恵姐さんがそっと目頭にタオルを当てていた。

「家族」。
なんや久しぶりに聞く言葉や。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第7話「関西国際空港は、雲一つなし」（前書き）

ちょっと、（だいぶやな・・・）年の差夫婦となったマサと菜穂美。
二人は新婚旅行に出発します。

第7話「関西国際空港は、雲一つなし」

第7話
「関西国際空港は、雲一つなし」

昨日までの嵐のような雨が
すっかり上がった関西国際空港。
義兄のベンツで阪神高速から
関空連絡橋を渡り、出発口へと
つける。
義兄と坂井さん、そして若い衆の
青木が見送りに来てくれた。
二人のスーツケースをカートに
載せて青木が押していく。

「マサ、菜穂美。
気ぃつけていってこいや。
向こうでは兄弟分の志水が全部
段取りしてくれとるからな。
志水によろしゅう言うといて
くれ」
「義兄さん、何から何までご面倒
かけてすんません」
「（♀）兄ちゃん、行ってくるわ
なぁ」
「叔父貴、チケット換えてきます
わ。
パスポートもお預かりします」

青木がカウンターの方へ走って
いった。
周りは俺たちと同じとおぼしき
新婚さんが殆どである。
みな各々見送りの衆を従えて
あちらこちらに話の輪が咲いて
いる。

「なぁ、はに〜。
俺らも新婚さんに見えるやろか
のぉ？」
「（♀）何言うてんの。
誰も2号さんと不倫旅行や言う
てへんて」
「言うとるがな。（笑）」

一同大爆笑である。

「叔父貴、そろそろゲートへ行か
れた方がよろしいかと」
「ああ、そやねぇ。
義兄さん、坂井さん、青木君。
忙しいところありがとうござい
ました。
ほな、行ってきます」
「おお、志水によろしゅう言う
といてくれ。
菜穂美、腰抜けるほどかわい
がってもらえよ。
ガハハハ」

「（♀）もぉ、お兄ちゃん」

坂井がさり気なく俺の横に来る。

「叔父貴、皆よりお祝いの気持ちです。
　些少ですが」

と、分厚い金封を手渡してくれた。

「すまん、気ぃ遣てもろて。
　ありがたく頂戴するわ。
　皆にもよう礼言うといてな」

「（♀）みんな、お土産期待しといてな。
　ほな、行って来ます」

お土産という言葉に義兄と坂井の目が光ったことに俺たちは気づくよしもなかった。

アナウンスが聞こえる。

「ご案内致します。
　ノースウェスト航空８０便、
　定刻９時５５分発　グァム行の
　お客様は出発ゲートの方へ
　お進み下さい。

Attention please.
The visitor for departure
from 9:55 Guam.
please advance towards
a departure gate at 80
flights of Northwest
Orient Airlines,
the appointed time.」

俺と菜穂美は腕を組み、義兄達に
一礼すると出発ゲートの中へと
進んでいった。

セキュリティチェックを経て税関
～出国審査カウンターへ向かう。
出国審査の審査官がこともあろう
大学の同級生だった勝部孝彦で
あった。
何と言う偶然。
彼も俺のことを覚えていた。

「いゃ、勝部君すごい久しぶり。
偉いさんが何してんの？」
「いゃあ、浜田君懐かしいなぁ。
審査官は人手不足で大変なん
や。
ほい、パスポートと搭乗券。
奥さん？」
「悪かったの、若い嫁さんで。
（笑）」

「これは、失礼。
良いご旅行を」

うしろで菜穂美が微笑みながら
やり取りを聞いている。
出国審査のゲートを抜けると、
ここからは外国になる（と、昔に
聞いたことがある）。
出発までしばらく時間があるので
免税店を冷やかすことに。

「（♀）そや、忘れんうちに
これ渡しとく」

と、菜穂美がクレジットカードを
くれた。

「あれ、いつのまに？
よう作れたのぉ、短期間で」
「（♀）うちの兄ちゃん、何やと
思てんの（笑）」

またまた、義兄に厄介をかけた
ようだ。

「へぇ〜、免税店言うても色々
あんねんなぁ」
「（♀）何、お上りさんみたいな
こと言うてんの（笑）」

事実、俺は完全にお上りさんの
気分だった。
俺がＧｕａｍへ発った時は伊丹（大阪
国際空港）からだったからなぁ。
菜穂美が脇目もふらずシャネルの
ブースに向かう。
をいをい。
何もここで買い物せんでも向こう
着いたらなんぼでもできるや
ないか。

「（♀）ねぇ、だ～りん。
うち、この指輪ほしい。
これとこれやったらペアになる
やん。
ね、お姉さん？」
「お目が高いですね。
これは、最新モデルでここ関空
でしか手に入れることができ
ないものなんですよ」

うわっ！
商売うまいわ、このお姉さん。

「（♀）ほしい、ほしい。
ぜ～ったい、ほしい。」
「わぁった、わぁった。
ほな、このカードで。
あっ、限度額越えへんか？」

また、頓珍漢なことを言って
しまった。
お姉さんが怪訝な顔をして
言った。

「お客様。
こちらのカードは、リミット
ございませんが？」

げっ！
そんなもんも知らんかった。
またまた、偶然にもサイズが二人
にぴったりやないかぇ。
かぁぁぁぁぁぁ・・・

「もし、サイズのお直しが必要で
ございましたら日本のシャネル
ブティックにお持ちいただけれ
ば、いつでも無料で承ります
ので」

はいはい、重ね重ねご親切に。

「（♀）だ〜りん、はい」

と菜穂美が指を出す。

俺は、買ったばかりの指輪を
菜穂美の薬指にはめた。

「（♀）だ～りんも、お手！」
俺は、思わず犬手してしまった。
菜穂美が微笑みながら握った
俺の指を開いて薬指に指輪を
はめた。

「ありがとうございました。
どうぞ、良いご旅行を」
満面の営業スマイルに見送られて
シャネルブティックを後にした。

「（♀）だ～りん、ありがと。
ｃｈｕ！」

・・・・・赤面

赤いウィングシャトル（ＡＧＴ）に
乗り、俺たちは搭乗口に向かう。
シャトルの外を見ながら俺が
言った。

「あっ！
義兄さんが手ぇ振ってる」
「（♀）え、どこどこ？」
「あふぉ。
見えるわけないやろぉ」
「（♀）もぉ、いけず～」

搭乗口はまだ開いていなかった。

「のど渇いたな。
おお、あっこに立ち飲みある
やん」

「（♀）あのねぇ、十三やない
ねんから・・・（笑）」

ふたりでビールを頼む。

「くぅ～、しみる～」

「（♀）何が、しみるや。
このオヤヂ（笑）」

「オヤヂ言うても、返事せぇへん
言うてるやろぉ」

二人の夫婦漫才のノリは息も
ぴったりのようだ。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第８話「紺碧のＧｕａｍ島へ」（前書き）

何年かぶりにＧｕａｍを訪れるマサ、飛行機に乗るのも海外旅行も初めての菜穂美。二人の甘～いハネムーンの始まりです。

第8話「紺碧のＧｕａｍ島へ」

第８話
「紺碧のＧｕａｍ島へ」

搭乗開始のアナウンスが流れ、
搭乗客がゲートへと流れ、列を
作り始める。
国際線では、ファーストクラス
↓ビジネスクラス↓エコノミー
クラスの順番で搭乗が始まる。
ファーストクラスに乗る俺達は、
最初にゲートを潜る。
ファーストクラスのシートは、
２×２で至極ゆったりとしていて
座り心地も頗る快適である。
席に着くと、すぐに飲み物の
サービスがある。
菜穂美は子供のようにはしゃぐ。

「（♀）これがファーストクラス
かぁ」

俺もファーストクラスは、初めて
である。
全員の搭乗が確認され、扉が閉じ
ロックされる。
フライトアテンダントが親指を
立て、ドアロック完了のサインを

交わす。
そして、離陸前の儀式「非常用設備の案内」である。
そうこうしているうちに機は滑走路の端へと進む。
エンジンの音が高くなりいよいよ離陸である。
定刻より5分遅れているようだ。
（まあ、5分位関係ないっしょ）
更にエンジンの音が高まり滑走を開始する。
離陸時のGが体を襲う。

「（♀）ひゃあ、シートに押しつけられる～」

俺たちの乗ったボーイング757は紺碧の空の上、水平飛行に移った。
禁煙のサインが消え、ベルト着用のサインが消えると機内は寛いだ雰囲気になった。
Ｇｕａｍ島までおよそ3時間。
時差は、＋1時間である。

「あんまし、酒飲みなや。
早う酔っぱらうし、トイレが近うなるからな」
「（♀）うん、わかった。
せやけど、何で酔っぱらうんが

早いん？」
「気圧の関係らしいで」
「（♀）ふ～ん、そうなんやぁ」

離陸してから1時間ほどでお食事
である。
エコノミークラスでは肉か魚か
訊かれるがファーストクラスでは
訊かれない。
そう、両方が出てくるからだ。
その上、お酒もワンランク上の
ものが出てくる。
俺たちは、シャンパン（スパーク
リングワインではない）を貰う。
お世辞にもアメリカ牛の肉は、
美味しいとは言い難いが、さすが
にファーストクラスのものは
美味しかった。
そう言えば焼き加減も訊かれたよ
なぁ。

途中、気流の乱れもなく順調に
フライトは続く。
ふと横を見ると菜穂美はうとうと
している。
ははは、昨日は遠足の前の子供の
ようにはしゃいでいたなぁ。
俺も、うとうとしていたようだ。
知らないうちに膝には毛布が掛け
られていた。

そろそろ着陸です、と起こされて
窓の外を見た。
菜穂美も目を覚まし、窓に顔を
つける。

「（♀）わぁ～・・・」

言葉が続かない。
眼下にリーフと海のコントラスト
が輝く。
そうか、菜穂美は海外旅行は、
初めてやったな。

機首が徐々に下がっていく。
しばらくすると鈍いショックが
あり、着陸した。
まず、ファーストクラスの乗客が
降ろされる。
昔と違い、Ｂ－７５７へはボー
ディングブリッジがつけられ
直接到着口へと渡ることができ
る。

入国審査を経て、荷物を受け取り
税関へ。
特に申告するものがなければ出口
へと向かう。
懐かしのＧｕａｍ島へ到着である。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第9話「Touch down on the Guam」（前書き）

無事にＧｕａｍへ到着した二人。バラ色の人生の始まり始まり・・・
。

第9話「Touch down on the Guam」

第９話
「Ｔｏｕｃｈ　ｄｏｗｎ　ｏｎ　ｔｈｅ　Ｇｕａｍ」

グァム国際空港の到着ロビーは
ごった返していた。
しかし、せかせかと動いている
のは日本人だけのようだ。

「歓迎　浜田様ご夫妻」

と書いたプレートを持った男が
いた。
お互いに目が合い近づいていく。
近くまで来るとかなりの大柄な
男である。

「お待ちしておりました。
志水がホテルでお待ちして
おります。
お荷物は、これだけでしょう
か？」
「あ、はい。
よろしくお願いします」

俺はスーツケースの乗ったカート
を預ける。

「（♀）暑～い。
うわっ、眩しい」

菜穂美がサングラスをかける。

「さあ、どうぞこちらです」

大男の先に止まっているのは真っ白のリムジンである。

「うわっ！
ほんまもんのリムジンや。
でかっ！」

車の中は冷房がよくきき、小さなバーのような感じである。

「Ｗｅｌｃｏｍ　Ｃｏｃｋｔａｉｌがございますが、そちらでよろしいでしょうか？
一応、何でもございますが？」
「それで、結構です。
菜穂美もそいでエエのぉ？」
「（♀）うん」
「申し遅れました。
浜田様のご滞在中お世話をさせていただきますジェームズ大西と申します。
ジミーとお呼び下さい」
「（♀）ジミー大西？

きゃっ、ジミーちゃんやて」
「これ。
いや、失礼」
「ははは、吉本のジミー大西と
同じ名前ですからね」

なんや、わかってるやないかこの
大男。

「（♀）あ、車が右を走ってる」
「はい。
グァムは、アメリカ合衆国の
準州でして日本とは違い車は
右を走るんですよ」
「（♀）へぇ～、そうなんやぁ」

菜穂美は無邪気に頷いた。
をいをい、菜穂美。
そんなことも知らんかったんか？

「少しばかり、大回りになります
がタムニング地区から
マリンドライブに入り、しばし
の間グァムの美しい海をご覧に
なって下さい」
「（♀）わぁ、きれいな海～。
感動～～」

マリンドライブ。
グァムのＲｏｕｔｅ　１である。

ジミーが、Ｇｕａｍを心底愛するＮｉｃｅ
Ｇｕｙ であることは後ほど知ること
になる。
車は、ほどなくタモン地区に入り
目指すＰａｃｉｆｉｃ Ｉｓｌａｎｄｓ Ｃｌｕｂ
（Ｐ．Ｉ．Ｃ．）Ｇｕａｍに到着した。

Ｐ．Ｉ．Ｃ．は１９９９年にロイヤル
タワーができ、Ｇｕａｍでも有数の
大型リゾートホテルとなって
いた。

ここでも、

「でかっ！」

だった。

「お荷物は、お部屋の方へ運ばせ
ておきます。
ロビーで志水がお待ちしており
ます。
さあ、どうぞこちらへ」

車から降りると日差しはとても
キツい。
しかし、空気はまるで違う。
ジミーに促されて俺たちは、
エントランスホールへと入って

いった。
ロビーの中程に目指す人物は俺達を待っていた。

「やあ、長旅お疲れ様でした。
志水です。
お初にお目にかかります」

陽に焼けた、義兄に比べてやや小柄な紳士が握手を求めてきた。

「こちらこそ、初めまして。
この度は、お世話になります」

俺はその手を握り、精一杯の笑顔で答えた。

「義兄から、くれぐれもよろしくとのことです。」
「金山の兄貴もお元気でご活躍のようで」

挨拶も済んだところで、

「お腹の方はいかがです？」

と、志水の叔父が聞いてくる。

「機内食が意外と美味しかったので、今は」

「そうですか。
では、向こうのラウンジへ行きましょか。
ここのジュース上手いんですよ」
「（♀）きゃは、楽しみ」
「これこれ」

また、菜穂美に『さとう珠緒』が降りてきたようだ。

「お二人の挙式は、明日の午後1時から『天使の教会』を押さえてあります。
わたしとわたしの妻が介添えをさせていただきます。
え～、これが教会の写真です」

「（♀）す・て・き・・・」

「あ、目に星が入っとる」

「夕食までにお二人の結婚衣装を合わせましょか」
「（♀）わぁ、なんか夢みたい」

菜穂美は完全に自分の世界に浸っているようだ。

「あの～、挙式はカトリックで

ないとあかんと聞いたんですが？」
「その辺りはぬかりなく手配しております。（微笑）」
「ありがとうございます」

さすがは義兄の兄弟分であった。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１０話「ラムちゃん？登場？」（前書き）

二人を温かく迎えてくれた志水の叔父貴夫妻。
え？姐さんの特技って何なんすか？

第１０話「ラムちゃん？登場？」

第１０話
「ラムちゃん？登場？」

「ほなら、衣装合わせに行き
ましょか。
ここは、アメリカですよって
紋付き袴とか文金高島田とかは
おませんけど堪忍でっせ」

「いやいや、そんな」

俺は慌てて手を振る。

「（♀）文金高島田も、憧れ
やってんけど・・・」

これ。
いきなり何を言い出しよんねん、
このオナゴは。

「ははは、どうしても言いはるん
やったら嫁が持ってきたやつが
おますけど、うちの嫁はデブ
ですよってなぁ。
奥さんに合いますかどうやら。
ははは」

「ビシッ！！」

「痛っ！　なんや飛んできましたわぁ。
悪口言うたら罰当たったんか？
それとも？」

びっくりしたぁ。
ほんまに
志水の叔父の頭の上で光線が
閃いた。

「（♀）あ！
これきっとラムちゃんの電撃や
わぁ」

志水の叔父がボソリと呟いた。

「知らんかった。
うちの嫁『うる星やつら』
やったんか」

一同大爆笑である。
関西人のノリはここＧｕａｍでも
生きているようである。

全窓フルスモークのスーパー
リムジンは、現地の人には珍しい
光景ではないようだが、日本人
カップルは皆珍しげに振り返って

いく。
突然、リムジンが止まった。
「ボス。
ちょっとすみません」
突然、ジミーが車から降りて
いった。
何やら日本人グループに言って
いるようだ。
戻ってきたジミーに俺は聞いて
みた。
「どないしたんですか？
なんぞあったようには見えま
せんでしたけど？」
「代わりに、わてがお答えします
わ。」
志水の叔父が続けた。
「あそこはね、市民の憩いの場
ですねん。
そこでゴミ散らかして騒いどる
子らがおったんで注意しに行き
よったんです。
こいつ、心底この島を愛して
ますんでね。
ルールを守らんやつは許せんの
ですわ。

堪忍したって下さい」
「（♀）ジミーちゃん、格好エエよ。
ね？
だ～りん」
「間違ったことしてる輩に注意すんのは当然です。
気ぃつきませんでした」

ジミーは言った。

「あんな子達でも国の未来を背負ってます。
しかし、間違いは間違い。
ちゃんと教えるのは我々大人の勤めです」

志水の叔父は満足げに頷くのであった。
道徳心を無くした子供達。
責任は、我々大人にあるんやと俺は改めてジミーに教えられた気がした。

車は、ビクトリア・ロードに入りある白亜の店の前で止まった。

「ああ。
あっこにうちのラムちゃんが待ってますわぁ」

志水の叔父が言った。
目を向けると、どこがデブや？
そら志水の叔父さん、失礼やわと
言う出で立ちの婦人が店の前に
佇んでいた。

「浜田はん、嫁の和美です」
「初めまして。
志水和美と申します。
奥さんに気に入っていただけ
そうなんを、なんぼかご用意
してますので見ていただけ
ます？」
「（♀）初めまして。
浜田菜穂美です。
この度は色々とお世話になり
ます」

女は、女同士。
すぐに、うち解けたようである。
一緒に店へ入ろうとした俺を
志水和美が優しく遮った。

「菜穂美さんのご衣装は、明日の
お楽しみと言うことで。
ご主人のものは別にご用意して
おりますので」
「浜田はんは、こちらの扉から
どうぞ」

志水の叔父に促される。
和美さんが店の扉を潜る時に振り向いて言った。

「あんたぁ。
また、うちの悪口言うたやろ？
帰ったらお仕置きやからね。
菜穂美さん、男は甘やかしたらすぐ調子のりますよってね。
ほな、行きましょか」
「うわっ、怖っ！
かーちゃん、堪忍やで」

う～ん、良き哉良き哉。
何か、理想の夫婦像を見る思いだ。
俺は、志水の叔父と別の扉から店に入っていった。

「この店は、和美に任せてますねん。
お気に召す衣装が必ずあると思いまっせ。
ああ。
それは、あきまへん。
その辺はどうでもエエぼんくら用です。
ささ、こちらのタキシードなんぞどないです？」

渋いシルバーの襟のタキシードを手に取った。

「これねぇ、裏地着いてますねん。
ほれ、どないです？」
「（うわっ、昇り竜や！）」
「これなんかも渋いでっせ」
「（鯉の滝昇り・・・）」
「これなんぞ、どないでっか？」
「（風神雷神かよ・・・）」

結局、志水の叔父の超お薦め「昇り竜」にすることにした。

「この上着はねぇ、仕掛けがおましてな。
後ろから見たらうっすらと柄が見えますねんで。
わはははは」
「（とほほ。
それは、それは）」

隣の部屋で菜穂美がキャイキャイ言う声が聞こえる。
俺の衣装は、すぐに決まったが隣では難航しているようである。

「オナゴちゅうのは、いくつに

なっても困ったもんですわぁ。
浜田はんも気ぃつけなはれや」

「バシッ！」

おっと、また電撃が飛んできたようだ。

「ホンマ、よう言わんわ。
また電撃や」

志水の叔父が首筋を撫でる。
隣の部屋から声が届く。

「あんた。
帰ったらほんまにお仕置きやからな。
覚悟しときや」

志水の叔父と二人で顔を見合わせて笑った。

「お仲のよろしいことで羨ましい限りです」

俺は微笑んだ。
扉が開いて和美さんと菜穂美が入ってきた。

「あんた、いらんこと言わんとい

てやぁ」

和美が開口一番志水の叔父を
睨んで言った。

「（♀）だいぶ、悩んだけど
決まったで。
最後は和美姐さんのお薦めに
さしてもうた」
「すんません。
お手数かけました。
よかったのぉ、菜穂美」

俺たちは、和美さんに礼を言い
ホテルへの帰途についた。

「（♀）だ～りん？
うち、泳ぎに行きたいわぁ」

志水の叔父が優しく言った。

「奥さん。
今日は一日我慢しときなはれ。
そでないと明日、せっかくの
ウェディングドレスが痛うて
着れんようになりまっせ」
「（♀）え？
ほんまですか？
それやったら、大人しいしと
こっと」

「その変わりＤｕｔｙ　Ｆｒｅｅ　Ｓｈｏｐｐｅｒｓ
行ってきなはれ。
エエもんがよ～さんあると思い
まっせ」
「そやね。
そないしょ。
菜穂美、エエな？」
「うん。
だ～りんとお買い物お買い物。
るんるん」

あっ！
また、『さとう珠緒』が降りてき
よった。

「ほなら、浜田はん。
手前は、仕事片付けてきます
よってゆっくり買い物でもして
来なはれ。
すんまへんけど途中で下ろして
もらいますわ。
７時にホテルのロビーで。
晩飯一緒に食いましょ」
「は、わかりました。
お忙しいところ、すんません
でした」
「なんの、なんの。
おおぉ、ジミー。
後は頼むで。」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ　！」

「ほな、手前はここで失礼して
もらいまっさ。
浜田はんも剛柔流の有段者や
言うて聞いてまっけど、こっち
の方は銃社会ですよってねぇ
気ぃ付けて下さいや。
一応、ジミーには持たしてます
けど用心はしといて下さいや」
「はい、わかりました。
ご配慮ありがとうございます」

志水の叔父はリムジンが去って
いくのを確認してビルの中へ
消えていった。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第11話「D．F．S．　Galleria」

第11話
「D．F．S．　Galleria」

志水の叔父と入れ替わりに一人の
若者が乗り込みジミーと運転を
代わった。

「わたしの舎弟のKenです。
名前はこんなんですが現地の
もんです」
「オ・ジ・キ。
ヨロシクオタノ、モウシマス」

片言の日本語でKenが俺たちに
挨拶をする。

「O．K．　！　Ken．
Nice meet you．
Call me Masa．
and this is my wife Naomi．
Ah　！
No，　say OJIKI．
OJIKI is Japanese Yakuza's
word．
We are not Yakuza．
HaHaHa　．．．」

ヤクザという言葉は、既に英語
にも取り入れられていてＫｅｎ
に通じたようである。
ジミーがＫｅｎにたずねた。

「Ｈａｖｅ　ｙｏｕ　Ｇｕｎ　ｆｏｒ　ｏｕｒ
　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　？」
「Ｙｅｓ，　ｈｅｒｅ　ｉｓ．」

何やかんや言うてもここは
アメリカである。
ガードマンでさえ、銃を腰から
ぶら下げている。
現地の許可を受けた者は大手を
振って銃を持てる。
これがアメリがなのであろう。

再び、ビクトリアロードから
タムニング地区に入り最大の
ショッピングセンターである
Ｄｕｔｙ　Ｆｒｅｅ　Ｓｈｏｐｐｅｒｓ　ｇａｌｌｅｒｉａ　に
到着した。

「（♀）わぁ～、なんや天保山
　マーケットプレイスみたい～」

をいをい。
ローカルなネタ出して来なや。

「（♀）ああ？

入り口にデコピンがいてる」
「ちゃうちゃう。
あれは、ただのガードマンや」
「（♀）せやけど、腰からチャカ
下げてるやんか」
「ははは。
ここは、アメリカっちゅうこと
やな」

２００１年９月１１日に起きた
アメリカ同時多発テロ以降、人の
集まる地域でのセキュリティーが
格段に強化されている。
Ｄｕｔｙ Ｆｒｅｅ Ｓｈｏｐｐｅｒｓ ｇａｌｌｅｒｉａ も
入り口ではミラーサングラスに
拳銃を腰から下げたガードマンが
エントランスに立哨している。

「はに～？
なんで彼らはミラーサングラス
かけてるか、わかるか？」
「（♀）え？
眩しいから？
単なる伊達で？」
「ブッブ～っ！」

ジミーがかわりに答えてくれた。

「ガードマンの視線がこちらから
わからないでしょ？

相手に行動を予測させないため
なんですね。
大統領のシークレットサービス
やＦＢＩもそうなんですよ」
「（♀）へ～。
アメリカて奥が深いんやぁ～」

菜穂美が変な感心の仕方をした。
Ｋｅｎが吹き出したところを
ジミーにはり倒された。

「Ｏｈ！ｍｙ・・・」

ジミーがガードマンに近づいて
いく。

「Ｈｉ！Ｊｉｍｍｙ.
Ｈｏｗ ａｒｅ ｙｏｕ ｔｈｉｓ ａｆｔｅｒｎｏｏｎ」

ジミーはガードマンと顔見知りの
ようだ。
二言三言言葉を掛け合いこちらに
戻ってきた。

「今日は手ぶらではないので一言
彼に断っておきました」

ああ、ジミーもＫｅｎも懐に
呑んでたんやっけ。

「（♀）あの～、もう入っても
よろしいんでしょうか？」
「さあ、どうぞ。
お腹が減ったら向こうにカフェ
テリアのＰｌａｎｅｔ　Ｈｏｌｌｙｗｏｏｄも
ありますから」

さり気なくジミーとＫｅｎが
ガードのポジションにつき俺達は
店内へと入っていった。
店内のブースには満面の笑みを
浮かべるポリネシア美人が・・・

「（♀）ね、だ～りん。
知らないお姉さんについて
行っちゃダ・メ・よ」

きょろきょろする俺は、早速釘を
刺された。

「（♀）いらんことしたら和美姐
さん直伝の電撃よ～」

かぁっ、もうそこまで伝授され
たんかいな。
ほんま、よ～言わんわぁ。

「Ｈｉ　！　Ｊｉｍｍｙ.　Ｈｉ　！　Ｋｅｎ　～」

各店のブースを通ると彼女達は

ジミー達に声をかける。
ジミーはここでも皆に顔馴染みの
ようである。
菜穂美がシャネル・ブティックを
見つけたようだ。
「ハイヒールのももこ」やない
ねんからシャネルばっか行くな
よぉ〜。
なんやかんや言うて菜穂美も
ナニワのお姉ちゃんのようで
ある。

「Good afternoon, miss.
Oh! Sorry, madam.
May I help you?」

早くもシャネルのお姉さん達は
臨戦態勢である。

「Ah! This ring is Kan-Ku
Premium version.
So good design.」
「(♀)ちょお、ちょお。
だ〜り〜ん、この人ら何言う
てんの?」
「菜穂美の指輪見て、これは関空
でないとない手に入らない
特別品ですね、言うとんねん」
「(♀)へぇ〜。
関空のシャネルのお姉さんが

言うたん営業トークとちゃう
かったんやぁ。
適当に聞いとったけど」

ちゃんと、聞いてるやないか。
それにしてもシャネルの連携は
すんごいねぇ。
俺もちょっと色気出して聞いて
みた。

「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．
Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｐｒｅｍｉｕｍ　ｖｅｒｓｉｏｎ
ｏｆ　Ｇｕａｍ　Ｄ．Ｆ．Ｓ．？」

お姉さん達のトークがヒート
アップする。

「Ｏｈ　！　ｙｅｓ．
Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｐｒｅｍｉｕｍ　ｖｅｒｓｉｏｎ
ｏｆ　Ｇｕａｍ．」

わっ、しもた。
出てくる、出てくる。
ブレスにネックに財布にバッグ、
その他諸々。
横を見ると菜穂美の目が爛々と
輝いている。

「（♀）これ、みんなもぉとく
わぁ」

「をいをい。
見んと買うてええんか？
勢いで言うてへんか？」
「（♀）エエやん、だ～りん。
あかんかったら、うち自分で
買うから」
「わ～った、わ～った。
Ｏ．Ｋ．Ａｌｌ ｂｕｙ ｉｔ．
Ｃｈｅｃｋ ｏｕｔ ｈｅｒｅ」

俺は、カードを出した。

「Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ，ｓｉｒ！
Ｉ ｄｏ ｃｕｓｔｏｄｙ ｏｆ ａ ｐｌａｔｉｎｕｍ
ｃａｒｄ．
ｊｕｓｔ ａ ｍｉｎｕｔｅ ｐｌｅａｓｅ，ｓｉｒ」
「（♀）やったぁ～。
あ～ん、うちのもんしか買うて
へんやん。
だ～りんのもんも買わなぁ～。
お姉さん、ちょい待ちや」
「Ｓｏｒｒｙ，ｗａｉｔ！ ｗａｉｔ！
なんやねんなぁ？
ほんま、おまえシャネルになる
と性格変わるんちゃうかぁ？」

シャネルのお姉さんが再び満面の
笑顔で振り向く。

「（♀）このブレスレットペアで

ちょうだい」

なんか菜穂美の気迫が通じたようである。

と言うよりこのお姉さん、もしかして日本語話せんのか？

「Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　？」

「はい、もちろん」

もぉ、無い頭絞って英語で喋ってたのに。

「こちらのブレスレットのペアですとこちらがよろしいかと。サイズも合うようですね」

「ほな、これも追加して下さい」

「Ｔｈａｋ　ｙｏｕ　ｓｉｒ　！」

大騒ぎの末、シャネルでのお買物は、終わった。

※この小説は、『フィクション』です。

実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」

です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１２話「再会。そして、友の誓い」

第１２話
「再会
～そして、友の誓い」

荷物は、後で受け取りに来ると
言うことでブレスレットだけ
もらってＰｌａｎｅｔ　Ｈｏｌｌｙｗｏｏｄへ
入っていった。
席に着いた俺の後ろにさり気なく
ＫＥＮが立つ。

「（♀）調子のって買い物したら
のど渇いてしもた」
「アルコールにされますか？
それとも、ソフトドリンク
に？」

ジミーがたずねる。

「ほんま、シャネルになると性格
変わるのぉ（笑）」
「（♀）ナニワ乙女はシャネルに
命かけなあかん言う法律があん
ねん。
だ～りん、知らんかった？」
「んなもん、知るかいな」
「（♀）あかんなぁ。

それモグリやでぇ」
「お話し中ですが、お飲み物は
どうされますか？」
ジミーが再度、たずねてくる。
「（♀）取り敢えず、生中！」
「いきなりかいっ！」
ジミーも苦笑いである。
「（♀）ここは、南国やしぃ、
枝豆とビール～」
「をいをい。
枝豆はないやろぉ、なんぼ
なんでも。
ジミー、なんぞ旨そうなもん
見繕ってくれっか？
１９時からディナーやから
あんまし腹に来んやつで」
「かしこまりました。
皆さん、バドでよろしいです
か？」
「あ、あかん。
バドはあかん。
クァーズにしてんか」
「（♀）何でなん？
何か嫌な思い出でもあんの？」
「後で、こそっと教えたる」

マイケルのホームパーティーでバドを噴水のように吹き出したことが、ふと頭を過ぎった。

「ジミー。Gun Shooting Sports Clubて知ってる？」

「はい。友人もたくさんおります。そこが何か？」

「Michael Soulて言う人、今でもおるんかなぁ？」

「はぁ、わたしの大親友です。彼をご存知で？」

「ああ。随分前にGuamに来た時に世話になったことあんねん」

「ほほぉ。これはこれは。ちょっと、電話してみましょうか？

Hey, Ken！

Handy phone！」

「Yes sir！」

Kenがジミーに携帯を渡す。

「Hi！Michael.

I'm Jimmy.

waｉｔ　ａ　ｍｉｎｕｔｅ.
どうぞ、本人が出てます」

携帯を渡される。

「Ｈｅｌｌｏ，　Ｍｉｃｈａｅｌ.
Ｄｏ　ｙｏｕ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｅ　？」

「Ｕｍ　？　．．．．　Ｓｏｒｒｙ.
Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ　？」

「Ａｈ．．．
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＹＡＭＡＳＨＩＲＯ－ＧＵＭＩ　？」

「ＹＡＭＡＳＨＩＲＯ－ＧＵＭＩ　？
Ａｈ　！　ハマちゃ～ん？」

「覚えとってくれた？」

「イェ～ス。
もちろんだよ～。
すんごい久しぶりだねぇ～」

「長いこと、会うてへんなぁ」

「そうだねぇ～。
あ゛！
もしかして、ハマちゃんも
いよいよテッポーダマか？」

「近いもんが、あるで。（笑）
今、Ｐｌａｎｅｔ　Ｈｏｌｌｙｗｏｏｄにおるんや」

「Ｏ．Ｋ．　Ｏ．Ｋ．
１０分で行くよ」

マイケルが来ることになった。

ジミーが教えてくれた。
「彼は、今あのクラブの支配人
ですね」
「ほぉ〜、出世したもんやなぁ」
１０分も経たずに保安官のような
格好をした恰幅のよい黒人が駆け
込んで来た。
「Ｏｈ　！
ハマちゃ〜ん。
元気やったかねぇ？」
再会を喜び抱擁する。
「マイケル。
何か、肥えたんとちゃうか？」
「肥えたんとちゃうか？
当たり前でんがな何年経つと
思てんねん？」
俺が教えた関西弁も健在である。
「紹介するわぁ。
わいのＷｉｆｅ、菜穂美やぁ」
「（♀）初めまして。
浜田菜穂美です。」
「ほぇ？
ほんまかいな、そうかいな。

あんたにもったいないくらい
別嬪さんやんかぁ～。
Ｎｉｃｅ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　！
菜穂美さ～ん」
「明日な、１３時から天使の教会
で式挙げるんや」
「そうなんかいなぁ。
それは、Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ　！
わいも行ってエエか？」
「来てくれるんか？
そら、うれしいわぁ」
「Ｏ．Ｋ．
わいのＷｉｆｅも連れて行くわな」

ふと、マイケルがテーブルの上を
見て言った。

「ハマちゃ～ん、何飲んでんの？
なんや、クアーズかいな。
バドやったら、また噴水しよる
とこやなぁ。
ワハハハハ」

あかん、バレてしもた。
菜穂美が笑いをかみ殺すのに
必死になっている。

「ほな、わいもクアーズや」
「をいをい、マイケル～。
おまえさん、車とちゃうんかい

な？」
「Ｎｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍ　！
Ｉ'ｍ　ａ　ｓａｆｅｔｙ　Ｄｒｉｖｅｒ．．．」
再び、テーブルは爆笑の渦に
包まれたのであった。

「さて、ほなら再会を祝して
『乾杯～　Ｃｈｅｅｒｓ　！』。
ハマちゃ～ん噴水は無しやで」
「１０－４（Ｔｅｎ－Ｆｏｕｒ）（笑）
『乾杯～　Ｃｈｅｅｒｓ　！』」
「（♀）噴水事件のこと教え
て～な」

マイケルが話し始めた。

「ハマちゃ～んとねぇ、仲良く
なってねぇ。
マイホームに招いたのよ。
まぁ、近所の友達もた～くさん
呼んでね。
ハマちゃんが初めてやけど
うま～い言うてヤシガニの
ローストを食ってたのね。
そこに、Ｒｏｙ　って言う悪い友達
がいて、ハマちゃ～んを騙して
グラス吸わせたのよ～。
ハマちゃ～ん、今でも煙草
吸う？

Ｏ．Ｋ．　Ｏ．Ｋ．
そしたらねぇ、ハマちゃ～ん
飲んでたビールみ～んな吹き
出してしまった。
そう、噴水のようにね」
「げぇ～。
あのタバコ、やっぱりそう
やったんか。
今の今まで飲み過ぎやと思てた
でぇ。かぁぁぁぁ」
「と、言う純真な東洋人が騙され
たと言うお話しでした」

「そやっ。
みんな、ちょ～待っといてん
か。
Ｋｅｎ　！　Ｃｏｍｅ　ｗｉｔｈ　ｍｅ」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ　！」
「（♀）なんやぁ？
どこ行くのん？」
「ええ子やから、ちょっとだけ
待っといて。
すぐ帰ってくるから」

俺は、Ｚｉｐｐｏのショップがあった
ことを思い出した。
Ｋｅｎを連れてその店に入って
いった。
今度はいらんこと言わんと

「Ａｈ，Ｃａｎ ｙｏｕ ｓｐｅａｋ
Ｊａｐａｎｅｓｅ？」
「はい、もちろん」
「この店で３つしかないと言う
極上のＺｉｐｐｏ 見してんか？」
「３つと、おっしゃいますと？」
「ああ、俺とＧｏｏｄ ｆｒｉｅｎｄ２人と
３つ。
そろいのやつがほしいんや」
「なるほど。
３つと言うのは、なかなか
ありません。
４つでしたらお客様の言われる
ようなものがございますが？」
「おお。
ほな、それ見してんか」
「ご予算的には？」
「なんぼでもかまへん」
「かしこまりました。
それでしたら極上のものを
ご用意致します」

待つこと数分。

「こちらなどは、いかがでしょう
か？
チタニウムの頑丈なボディに
『白虎、青龍、朱雀、玄武』
が、それぞれあしらわれて
おります。

おそらくグァム中お探しに
なられても同じものはないと
思います。
紛い物の多いと言われるＺｉｐｐｏ
ですが間違いなくＺｉｐｐｏの
ハンドメイドでございます」
「よっしゃ。
ほな、これ４つおくれ。
白虎、朱雀、玄武の３つを
それぞれ、ギフトにしてんか」
「ありがとうございます。
少々お待ち下さい」

俺は、４つの小さなパッケージを
持って席へ戻って行った。

「すまん、すまん。
ご無礼しました」

俺は、買って来たものをテーブル
の上にに置いた。

「マイケルとは、再会を祝して。
ジミーとＫｅｎには、これから
も、よろしゅうと言うことで
受け取ってんか」
「な～に、くれんのかなぁ？
ハマちゃ～ん」
「わたしなどが、いただいても
よろしいのですか？」

「マイケルのは『白虎』
ジミーのは『朱雀』
俺は、『青龍』。
ほんでＫｅｎは『玄武』や。
これを４つ合わせたら『四神』
や」
「おぉ、ハマちゃ～ん。
Ｇｏｏｄ　Ｆｒｉｅｎｄの誓いやね？」
「そう言うこっちゃ」
「ありがたく、頂戴します。
Ｈｅｙ！　Ｋｅｎ」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｓｉｒ　！」
「こいで、わいらはＧｏｏｄ　Ｆｒｉｅｎｄ
や。
はに～、俺になんぞあっても
みんなが助けてくれるからな」
「（♀）兄弟の契りちゅうわけ
やね？」
「いや。
みんなＥｖｅｎの大事な友や」
「ハマちゃ～ん、大事にするよ。
おおきにね」
「大切にさせていただきます」
「それでは、ハマちゃ～ん。
わいは仕事に戻るとするねぇ。
明日は、ワイフを連れて行く
からよろしくね～。
うちのクラブにもおいでや。
ほな、菜穂美さ～ん。
明日、別嬪さんなとこ見して

もらいに行きますね～」

マイケルが仕事に戻っていった。

「（♀）だ～りん、色んな所に
知り合いがいるんやねぇ。
びっくりやわぁ」

「そないなことあれへんて。
それよりジミーとマイケルが
知り合いやった言う方が驚きや
でぇ」

「（♀）だ～りん。
もうちょい、お買い物しても
エエかなぁ？」

「なんや、まだ買い物すんの
かいな」

「（♀）ビーチドレスもほしい
しぃ、さっきちらっと可愛い
水着もあったしぃ～。
やっぱり、だ～りんとおそろい
の服とかもほしいしぃ～」

「そやな、俺もアロハシャツ
くらいほしいなぁ。
ほな、行こか」

「（♀）うん。
うちが、だ～りんのシャツ
選んであげる」

結局、なんやかんやと一杯買い物
してしまった。

俺も前からほしかったロレックス
ディトナ・ブラックコンビを
買った。

こりゃあ、日本に帰る前から税金
の計算しとかんとやばいかなぁ。

俺達は、ホテルに戻ることに
した。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１３話「暮れゆくグァム」

第１３話
「暮れゆくグァム」

俺たちの部屋は、ロイヤルタワーにあるロイヤルスイートだった。もちろんオーシャンビューである。
眼下には、Ｐ．Ｉ．Ｃ．のプールやマリン・アクティビティー、ランドアクティビティーが広がっている。

俺は、実は高いところは好きではない。
しかし、この眺めはそんなことを言ってられない。
窓辺のチェアに腰を下ろしタバコを咥える。
さっき買った青龍のＺｉｐｐｏ　で火をつけてみる。
テーブルにはトロピカルフルーツのバケットが置いてある。
ウェルカムドリンクは、スパークリングワインだった。
タバコの火を消して窓辺に佇むと脇に菜穂美が寄り添ってくる。

「はに～。
やっと二人きりになれたな」
「（♀）うん。
おおきに、グァムに連れてきてくれて」
「何言うてんねん。
一緒になってから何もしたってへん。
堪忍やで。
義兄さんのおかげでこない立派なところに滞在できるんや。
ありがとうは、俺の方が言わなあかん」
「（♀）うちのこと、離さんといてな」
「当たり前じゃ。
俺は、全身全霊、全力でおまえを愛するんや。」
「（♀）だ～りん、愛してる」

菜穂美が目を閉じてやや顔を上げる。
自然に二人の唇は・・・。

二人でシャワーを浴びているうちにどちらからともなく求め合ってしまった俺達。
夕食前の運動と言うことで（笑）
俺は、菜穂美に選んでもらった

淡いブルーのアロハシャツと白のスラックス。
白のエナメルシューズにレイバンのサングラスの出で立ち。
菜穂美は、俺と同じ柄でやや
ピンクがかったビーチドレスに
白のサンダル、そしてシャネルのサングラス。
どこから見ても二人は新婚さんである。

１９時に俺たちは、志水夫妻と
ロビーで落ち合った。
志水の叔父は白のバロンタガログに白のメッシュのシューズ。
さすがに渋い。
和美さんは、クリーム地に
ブーゲンビリアをあしらった
ムームーでご登場である。
後ろにジミーとＫｅｎが従う。

「ほな、行きましょうか。
ショーを見ながらうまいもん
食いましょ。」

志水夫妻の後ろをついていく。
時々、志水夫妻は立ち止まって
道行く人と挨拶を交わす。
彼は、地元では名士で通っている
らしい。

ショーまでまだしばらく時間が
あるようなのでデッキに出て軽く
一杯やることになった。
１９時でもまだ明るく沈む夕陽を
見ることができた。
あ、また菜穂美の瞳に星が入り
出した・・・。

「いつ見ても、この夕陽はきれい
ですわぁ。
なぁ、和美」
「ホンマやわ。
浜田はんらも、こっちに住み
はったらどない？
悪いとことちゃいますよ」
「ははは、ほんまですねぇ」

俺と菜穂美はブルーハワイ、
志水夫妻は、ソフトドリンクで
ある。
ジミーとＫｅｎもコーラを飲んで
いる。

「明日、式が終わったら
サンセットクルーズ行って
きはったら？」

和美さんが言う。

「（♀）わぁ、それも楽しそう」
「なんや、夕陽を肴になんぼでもいけそうですなぁ」
「はははは。
なんぼでもいってもうたら、
あっちの世界行きまっせ」

男二人はアホなことを言い合っている。

「ボス、そろそろ場所を移動された方が・・・」

ジミーが囁く。

「そやな、ほな浜田はん。
アンフィーシアターの方行きましょか」
「（♀）わぁ、楽しみやわぁ。
志水の叔父さん。
うち、海外初めてですねんわ」
「あぁ、そらあかん。
あのショー見たら気ぃ失うかもしれまへんで。
わはははははは」
「あんた、何言うてんの。
堪忍な、菜穂美ちゃん」
「（♀）大丈夫です。
うちには、だ～りんがいてますさかい（笑）」

「それはそれは、ご馳走さま」

和美さんが微笑む。

辺りが闇に沈み始め、ショーが始まった。

豪快な火の踊り。

時に激しく、時にユーモラスに。

菜穂美は、気を失うことなくご満悦の様子だった。

※この小説は、『フィクション』です。

実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。

著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１４話「俺のラムちゃん誕生？」

第１４話
「俺のラムちゃん誕生？」

俺の横には、健やかに寝息を立てている菜穂美がいる。
寝顔を見つめる俺の視線を感じたのか、瞼がゆっくりと開いた。

「すまん、起こしてもたな」
「（♀）おはよう、だ～りん」

お目覚めのキスは甘かった。

部屋の中はエアコンがほどよく効いている。
昨日は激しく愛しあった俺達。
今朝の目覚めはとても爽やかだった。

「（♀）今、何時かなぁ？」

俺は、昨日買ったばかりのロレックスを見る。

「現地時間で、そろそろ８時でございますよ、お嬢様」

執事のようにおどけて俺が言う。
「（♀）そろそろ、起きて
シャワーせなぁ。
美容室行って髪結うてもらわな
アカンしぃ」
俺の頭はネービーカットなので
頭を洗ってもすぐ乾くし、特に
セットの必要はないのだが菜穂美
はそうはいかない。
「そやな。
それより朝飯も食わんとあかん
で」
「（♀）何やぁ。
だ～りんは、色気より食い気
かいな」
「何言うてんのや？
朝飯は一日の源やねんで。
例えちょこっとでも腹になんぞ
入れとかんと」
俺は、やさしくお嬢様に言った。
「（♀）え～。
だーりん、うちをブタにしよう
としてへん？」
「イヤイヤ。
滅相もございません、お嬢様。

もしかの時は喰らわしてもらおかとは思ってますが・・・
さぞかし、美味しいことでしょう」
「（♀）何、言うてんのぉ。
今までさんざん喰らってるやないのぉ。
そんなこと言う子には、和美姐さん譲りの電撃よぉ～」
「ひぇ～。
それだけは、ご勘弁を～」

朝から俺たちの夫婦漫才は絶好調である。
せ～の～で、ベッドから降りてカーテンを開ける。
真っ青な空とエメラルドグリーンの海が眼下に広がる。
今日もグァムはドピーカン。
絶好の婚礼日和である。

菜穂美がバスルームに向かう。
テレビのスイッチを入れると、

「Ｉ　ｒｅｃｅｉｖｅ　ａ　ｍｅｓｓａｇｅ．
Ｐｌｅａｓｅ　ｃｏｎｔａｃｔ　ｉｔ
ｔｏ　ｔｈｅ　ｆｒｏｎｔ　ｄｅｓｋ．」
「メッセージをお預かりしております。
フロントまでご連絡下さい」

の、文字が流れる。
早速フロントデスク、ダイヤル０
（ゼロ）をプッシュする。

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ，　ｓｉｒ．
Ｍａｙ　Ｉ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ　？」
「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ．
Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ａ　ｍｅｓｓａｇｅ　ｆｏｒ
ｍｅ　？
Ａｈ，
ｐｌｅａｓｅ　ｓａｙ　ｉｎ　Ｊａｐａｎｅｓｅ．」
「少々お待ち下さい。
Ｍｒ．大西が９時にお迎えに
来られるとのことです」
「ありがとう、わかりました」

電話を切る。

「（♀）だ～り～ん？」

バスルームから菜穂美が俺を
呼ぶ。

「なんやぁ？
どないした？」
「（♀）だ～りんもシャワー
せんと。
ほらぁ～」

可愛い手がおいでおいでをして

いる。

「ジミーが9時に迎えに来るそうや」

「（♀）や～ん、せっかく一発
してもらおう思たのにぃ～」

「何、言うとんねん。
このお嬢様は・・・」

結局、バス・ルームに引き込まれ
・・・合体。

慌てて身支度を整えた俺達は
ロビーへと降りていった。
ロビーには、ジミーとＫｅｎ。
そして、一人の陽に焼けた美人が
待っていた。

「おはようございます。
夕べは、よくおやすみになれ
ましたか？」

「おはよう、ジミー」

「（♀）それがぁ、あんまり～。
だってぇ、だ～りんが離して
くれへんねんも～ん」

「（こりゃ。
挨拶もそこそこに何を言うねん
このオナゴは）。
いや、失礼。

そこそこ、いや、ゆっくり。
痛ぇ、噛んだやないか」
朝から皆で爆笑である。
「浜田さん。
本日、菜穂美さんのお世話を
させていただきます妻のエリー
です。
日本語も大丈夫ですので何なり
と」
「（♀）初めましてエリーさん。
よろしくお願いします」
「菜穂美さん。
初めまして、エリー大西です。
行き届かないこともあるかと
思いますが、よろしくお願い
します」
「ジミー、すまん。
朝飯、食ってるヒマあるやろか
のぉ？」
「ああ、わたしも今それをお尋ね
しようと思っていました。
大丈夫ですよ。
まだ、十分に時間はあります
ので」
俺は、ジミーに耳打ちした。
「よかった。

朝からあいつに、バスルームで
襲われたんや・・・」

ジミーが吹き出しそうになるのを
堪えて言った。

「それは、それは。
朝からご馳走様でございます」

「ビシッ！」
「バシッ！」

俺とジミーの首筋に青い火花が
散った。
おそるおそる振り返ると、菜穂美
とエリーが笑っていた。

「あんたんとこもかいな？」
「はぁ、早速直伝を受けられた
ようですねぇ」
「（♀）だ～りん。
言うたでしょ。
和美姐さんに習た言うて」

朝食はビュッフェスタイルの
バイキングである。
日本人客が多いせいか和食も充実
している。

「ジミー達は？」

「はい。
わたしたちもご一緒させていた
だきます」

みな好きなものを選んでテーブル
に着く。

「わぃは、朝は絶対みそ汁と飯
なんや。
あと、タクアンがあったらエエ
なぁ。
これに、だし巻きとヒジキが
あったらもう言うことない
ねん」
「（♀）偉そうに言うて、あんた
魚食べへんやんか。
好き嫌いしたらアカンで」
「何言うてんねん。
死んだ、ばぁちゃんから男は
朝から魚なんか食べたらアカン
言われとったんや」
「（♀）晩飯の時なんか、もっと
食べへんくせに」
「おまえも、ごちゃごちゃ言う
てんと早よ食わんかいな」
「（♀）そやぁ。
エリーさん聞いてぇなぁ」
「はいはい、何でしょう？」
「（♀）だ〜りんなぁ、うちの
ことブタにして食べる言うねん

でぇ。
どない思います？
食べ頃のオナゴ捕まえて失礼や
と思いません？」
「ちょっと、返す言葉が思いつき
ませんね。
でも仲のよろしい証しだと思い
ますわ。
うちの人なんか食べようと言う
気がとっくの昔になくなった
みたいですもの」

おっと、何やらジミーがやり玉に
挙げられたようだ。

「いやいや、こんだけわしら亭主
連中ボロカス言われてしもたら
立つ瀬がないわぁ。
なぁ、ジミー？」
「・・・」

Ｋｅｎが後ろで必死に笑いを堪え
ている。

俺は、自慢ではないが早飯だ。
皆がまだ食べ終わっていないので
自然に皆を待つ形になる。
冷たい紅茶でもほしいなとふと
思ったところ、菜穂美がすっと
立ち上がった。

「（♀）だ〜りん、冷たい紅茶
やろ？
ちょぉ、待っといて。
Ｋｅｎちゃん、エエよ。
うち、行ってくるから」

なんやかんや言うても菜穂美は、
ええオンナであり、良き妻で
ある。
心なしかジミーが羨ましそうな
顔をしている。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１５話「天使の教会にて」

第１５話
「天使の教会にて」

「ああ、腹一杯になったら眠とぉなってきたぞぉ。」
「（♀）どこぞで、誰かが永遠の眠りにつきたがってるみたいやねぇ？
あっちの世界に行きたいのは誰かなぁ？
Ｈｏｎｅｙ　Ｆｌａｓｈ　！」

「バシッ！」

「・・・つぅ」
「（♀）だ～りん、どない？
お目々醒めたぁ？」
「はい。
あっちの世界から、ただ今戻りました。
ホンマに、よぉ～言わんわぁ。
今度は、キューティーハニーかいな」

またまた大爆笑である。

「さて、菜穂美さん。

そろそろ美容室の方へ。
エリー、菜穂美さんをお連れしてくれるか？」
「はい。
それでは、菜穂美さん参りましょうか？」
「（♀）よろしく、お願いします。
ほな、だ～りん。
エエ子にしてんねんで」
「カ～ちゃん、行かんといてくれぇぇぇ」
「（♀）ホンマに、何言い出すんこの人は。
エエ子やからね　Ｃｈｕ　！」
「Ｃｈｕ　！
わかった。
行っておいで。
エリーさん、よろしゅう頼んます」

エリーに連れられて菜穂美が美容室に向かった。

「ほな、わいも散髪行こかのぉ。
なんぼネービーカットや言うてキレイにしとった方がエエやろ？」
「そうですね。
わたし達もお付き合いしま

しょう」

俺たち男組は散髪に行くことになった。

後ろにKenが続く。

青く透き通った空、燦々と降り注ぐ太陽の光を浴びて、よく通る声が響き渡る。

「Bridegroom.
Do you take bride to be your wife,
to have and to hold
from this day forward,
for better or for worse,
for richer, for poorer,
in sickness and in health,
to love and to cherish,
and promise to be faithful
to you until death parts
you ?」

「新郎よ。
あなたは妻となる新婦を、
良い時も悪い時も、
富める時も貧しき時も、
病める時も健やかなる時も、

死がふたりを分かつまで、
愛し慈しみ貞節を守ることを
誓いますか？」

「Ｙｅｓ，Ｉ ｄｏ．」
「Ｂｒｉｄｅ，ａｎｄ ｙｏｕ？」
「Ｙｅｓ，Ｉ ｄｏ．」

「はい、誓います」
「新婦、あなたは？」
「はい、誓います」

純白のウエディングドレスの
菜穂美と頷き合い、誓いのキス。
（＾３＾）

ＫＥＮがデジタルビデオで俺達を
写していく。
チャペルの鐘が鳴り響き、
チャモロ・シンガーズの歌声が
響く。

志水叔父と和美さん、
ジミーとエリー、
マイケルとリンダ。
それぞれの視線が俺たちに注が
れる。
二人きりで式をと言ってはみた
ものの、親しいものの祝福を
受けて結婚式を挙げるのは、

やはり嬉しいものである。
菜穂美の頬に一筋の涙が光る。

「菜穂美、生涯おまえのこと
離さへんぞ。
愛してる」
「うちも、生涯あんたのとこ
離れへん。
愛してる」

「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！
ｏｎ ｍａｒｒｉａｇｅ，
Ｍａｓａ！ａｎｄ Ｎａｏｍｉ！」

ライスシャワーが注がれる。
俺たちの結婚式の様子は、
ＦＯＭＡを通じて義兄の元へ伝えられ
ている。
義兄のバリトンが聞こえてきた。

「マサ、菜穂美。
結婚おめでとう。
二人でシアワセを・・・」

義兄が涙ぐむ。
俺も菜穂美も言葉が出て
こない。

「ありがとうございました」

二人で必死になって声を出す。
しかし、涙で声にならなかった。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第16話「Sweet more sweet “Honey Moon” party」

第16話
「Sweet more sweet
“Honey Moon” party」

「Congratulations on marriage
ハマちゃ～ん&菜穂美さ～ん」

チャペルの周りは、いつの間にか
人でいっぱいになっていた。
非番の志水の叔父の会社の人達、
Gun Shooting Sports Clubの
面々。
みんな、俺たちに祝福の言葉を
かけてくれる。

「Hey, Everybody!
Let's toss Hama-chan
shoulder-high into the air」
「ワッショイ、ワッショイ。
おめでとう～、ハマちゃ～ん」

マイケルの呼びかけで、俺は
グァムの青空に舞った。

「(♀)えいっ!」

菜穂美がブライダルブーケを

青空高く投げる。

「それでは、新郎、新婦は、お車の方へどうぞ」

俺と菜穂美。
志水叔父と和美さん。
ジミーとエリー、
マイケルとリンダが
リムジンに乗り込む。
運転はＫｅｎである。

「Ｍａｎｙ Ｔｈａｎｋｓ ｆｏｒ ｕｓ．
Ｗｅ ｐｒｏｍｉｓｅ ｔｈａｔ ｗｅ ｆｉｎｄ
ｈａｐｐｉｎｅｓｓ． Ｔｈａｎｋ ｙｏｕ．」

見送ってくれる方達に、俺は
叫んだ。

「お二人ともお疲れ様でした。
それでは、ホテルに戻って
披露宴と参りましょう。
Ｈｅｙ， Ｋｅｎ． Ｌｅｔ's ｇｏ」
「Ｙｅｓ， ｓｉｒ！」

志水の叔父の言葉で俺たちの
乗ったリムジンは天使の教会を
後にした。

「（♀）なんや、うち夢見てる
ようやわぁ」
「菜穂美。
おまえ、最高に別嬪やったで。
ますます惚れ直したでぇ」
「（♀）いや～ん。だ～りんも
最高に男前やったぁ。
ありがと。　Ｃｈｕ　！　」
俺の頬にキスマークが・・・。
それを見て皆が一斉に頭を
下げた。

「ごちそうさまでした！」

大爆笑である。

「これで、お二人は名実ともに
ご夫婦やぁ。
あの誓いの言葉忘れたらあきま
へんで」

志水の叔父の言葉は重みがある。

「そう。
でも男言うのはね、ほったら
かしといたらどこ行きよるか
わからへんのよ。
最初が肝心やからね。
しょうむないことしよったら

遠慮のぉ電撃食らわしたん
ねんよ」
「（♀）はい。
わかりました、和美姐さん
（笑）」

うわっ、早くも和美さんから
人生訓かいな。
慌てて、首筋を押さえる男達
だった。

「なんや、マイケルも喰らった
ことあるんかいな？」
「そやねん。
うちの奥さんも和美さん直伝
やねん。
とほほ・・・」

リンダが言った。

「何がとほほよ～？
帰ったらお仕置きですからね。
覚悟なさ～い」

どうやら、和美さんは島の嫁達を
傘下におさめているようである。

ホテルに戻って驚いた。
エントランスには、南国の花を

模したバージンロードが敷かれて
いた。
そして、その両脇に支配人以下
ホテルスタッフが勢揃いして
いた。

「支配人の　Ｒｏｙ　Ｅｄｗａｒｓ　でございます。
この度は、誠におめでとう
ございます。
ささやかではございますが
ホテルよりお祝いをさせて
いただきます」

レセプションのお嬢さん達から
大きな花束が贈られた。
ホテルの人達の祝福を受け俺達は
メインダイニング「ビストロ」へ
と向かった。

「（♀）ほんま、むっちゃ
びっくりしたわぁ。
ホテルの玄関からバージン
ロードになってると思てへん
かった」
「ほんまやなぁ。
せやけど、これも地元の名士
志水の叔父のおかげやで。
志水の叔父貴、ほんまに
ありがとうございました」

「何言うてますのん。
Ｒｏｙ がどないしても何かさして
くれ言うてきよったからです
わぁ」
「せやけど、人相変わって穏やか
な顔してたけど、あの人もしか
して？」

マイケルがうなずく。

「Ｄｉｎｇ ！ ｄｏｎｇ ！
そうよ～。
あのＲｏｙやんか」

くぅぅ。
月日の流れは皆を変えていくのん
やなぁ。
タキシードとウェディングドレス
姿の俺たちがビストロに入って
いくと店内にいた人達から

「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ
ｏｎ ｍａｒｒｉａｇｅ ！」

と、一斉に声が上がった。
どうやら、志水の叔父の関係の
人達のようである。
俺たちが席に着くと先ほどの
Ｒｏｙが近寄ってきた。

「浜田様。
ホテルよりお祝いのお酒で
ございます」
「ありがとうございます。
でも、あのタバコとバドは
勘弁して下さいや。
ははは。」
「Ｔｅｎ－Ｆｏｕｒ．
覚えておられましたか？
その節は大変失礼致しました」
軽く片目をつむって我々だけに
通じる挨拶を送ってよこした。

「いやいや。
本日は最大のおもてなし感謝
します」

俺たちは固い握手を交わすので
あった。
志水の叔父が立ち上がった。
ボディーガードを従えて一人の
紳士が近づいてくる。

「浜田さん、志水さん。
この度は誠におめでとうございます。
準州知事のカマチです」
「これは、Ｍｒ．カマチ。
本日はご臨席賜りまして感謝
します」

ほんまに、志水の叔父は顔が
広いというか何と言うか。

先ほどのカマチ準州知事の乾杯の
音頭でパーティーが始まった。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第17話「Sunset Cruise」

第17話
「Sunset Cruise」
日本の披露宴と違い来賓挨拶など
はない。
その代わり俺たちはキャンドル
サービスよろしく志水叔父夫妻の
介添えで各テーブルをまわって
挨拶をしてまわる。
パーティーは終了の挨拶もなく
三々五々それぞれの都合で散って
行く。
これがスタイルのようである。

俺たちは、和美さんお薦めの
サンセットクルーズに出かけた。

「はに〜。
おまえ、船大丈夫やろな？」
「（♀）だ〜りんのお腹の上ほど
揺れへんやろ？
それやったら、大丈夫やと思う
で」
「ははは。
何言うてんねんこいつは。
めっちゃ可愛いやっちゃな。
ほな、俺のKissで酔うてもらお

か」
「いや～ん、何キザなこと言うてんのぉ。
このスケベオヤヂ」
「もっぺん念のため言うとくぞ。
オヤヂ言うても返事せぇへんからな（笑）」

軽～く夫婦漫才をしながら俺達はハーバーへと向かった。
後ろにはジミーとエリーが続く。

「浜田さん、昨日もご覧になったと思いますがグァムの夕陽はどこにも負けないくらい美しく厳かですよ」
「そうですよ。
何度見ても良いものですわ」

ジミーとエリーが言う。

「（♀）すごい楽しみやわぁ」

ハガンタシ号。
チャモロ語で「ウミガメ」と言う意味らしい。
船内は日本人の新婚さんや家族でほぼ満員の状態である。
船内に出航のアナウンスが響く。

「本日は、ハガンタシ号へようこそ。
当船は、波の穏やかな湾内での航行です。どうぞ、ご安心の上他では味わえないこの夢のようなロマンティックなひと時と興奮をご満喫下さい」

ハガンタシ号は、静かに岸壁を離れて行った。

「（♀）わぁ、間近で見る夕陽てすんごい。
な～んか日の出と違て、胸打つもんがあるわぁ。
うるうる」

お～っと、また「さとう珠緒」が降りてきよったぞ。

しばし、俺たちは沈み行く夕陽に心を奪われていた。
エアコンのない吹き抜けの船内であるが潮風が心地良い。

「お？
何や、エエ匂いがしてきたぞ」
「（♀）もぉ！
人がロマンチックな気分に

浸ってるのにぃ。
あんたは、ほんまに色気より
食い気やなぁ。
そないに腹減ってんねんやった
ら、うちをタ・ベ・テ・」
「いただきまっせ〜。
それは、ホテルに帰ってから
ゆっくりと」
「（♀）アカン。
やっぱり、スケベオヤヂや」
「オヤヂ言うても返事せん言う
てるやろぉが」
「（♀）返事してるやんか。
よぉ、言わんわこのオヤヂ」
「お仲のよろしいことですわ」

エリーがかすかにジミーを睨み
ながら微笑む。

「ゴホン。
さて、そろそろテーブルの方へ
参りましょうか」

ジミーが慌て言った。
料理は、オリジナルを崩さない
程度に日本人好みにアレンジした
チャモロ料理である。

「（♀）うわぁ、美味しい〜
けど、ちょっとピリっとすん

ねぇ？」
「ほんまやぁ。
こりゃあ、ピリ旨やなぁ」
「（♀）うぅわぁっ、でかっ！
何、これ？」

しばし、言葉を忘れて料理の方に向かう。
色とりどりのトロピカルドリンクも美味しい。
食が進む、進む。

中央の方では、何やら始まったようである。
陽気な音楽と共に、エンターティナーが現れダンスパーティーの始まりである。

「（♀）だ～りん。
うちらも踊りに行こ。
ほらぁ、ジミーさんも
エリーさんも行こ行こ」
「よっしゃ。
ほな、行こか」

ハワイアンあり、チャモロあり、カントリーやブルーグラスありでフォークダンスのメロディまで流れてくる。

これらが全て生演奏である。
最後は、お約束のビンゴゲームで
締めくくりであった。

「カメラをお持ちの上、軽装で
お越し下さい」

の意味が、ここでわかった次第で
ある。

ハガンタシ号が静かに着岸した。

「（♀）いやぁん。
むっちゃ楽しかったわぁ」
「ほんまやな。
まさか、船の上で踊るとは思て
へんかった」
「いやいや。
この様な形式は、普通なん
ですよ。
さてと、明日はどの様にされ
ますか？」
「（♀）決まってるやん。
明日は、Ｏｎ　ｔｈｅ　Ｂｅａｃｈやんか。
ねっ？だ～りん」
「そやな。
菜穂美もお気にの水着、着たい
やろぉし、そないしょ」
「わかりました。
それでは、明日はゆっくりと

１０時頃にお迎えに参ります」
「Ｔｅｎ－ｆｏｕｒ。
そしたら、ジミー明日は１０時
にロビー言うことで」
「それでは、ホテルまでお送り
致しましょう」

俺たちは、ホテルへの帰途に
ついた。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第１８話「誓いの儀式、そして・・・」

第１８話
「誓いの儀式、そして・・・」
部屋に戻って一風呂浴びた俺達。
「はに～。
今日は世界で一番別嬪やった
で。
疲れたやろ？」
「（♀）おおきに。Ｃｈｕ！
ううん。
疲れてなんかあらへん」
「さて。
明日はどないすんねん？」
「（♀）う～ん・・・
この泳げる水族館言うの行って
みた～い」

「おお、こらぁエエわぁ。お魚に
なったワ・タ・シちゅうやっ
ちゃな？
はに～は、スキンダイビング
でけんのか？」
「（♀）何、それ？」
「シュノーケリングとも言うな。
知らんかぁ？
それやったら最初から教えたる

わぁ。
こない見えてもＰＡＤＩのＡｄｖａｎｃｅ
持っとるさかいな」
「（♀）やさしいしてな。
あんた、体育会系やから」
「ははは。
心配しなて。
そやな、いきなりタンク背負て
スキューバ言うのも楽しいかも
しれへんな」
「（♀）うん。
だ～りんと一緒やったらでき
そうな気ぃするわ」
「よっしゃ。
ほな、そろそろ寝よかい」

「（♀）・・・」
「ん？
どないしたんや？」
「（♀）だ～りんにな、どない
しても言うときたいことあん
ねん」

菜穂美がベッドの上で正座し、
改まって言った。
俺も思わずベッドの上で佇まいを
正す。

「な、なんやねん？
急に改まって」

「（♀）雅美さん。
こないな、阿婆擦れ女を嫁に
してもろて本当にありがとう
ございます。
ふつつかな嫁ですが今後とも
よろしくお願み申します」

ベッドの上で菜穂美が三つ指を
ついて頭を下げた。

「ほな、俺も改めまして。
菜穂美さん。
極楽とんぼのわたしですが命の
続く限り、あなたを全身全霊
かけて守り抜きます。
こちらこそ今後ともよろしく
お願み申します」

俺は拳の中に親指を握り、作法に
則って頭を下げた。
気がつけば、菜穂美の頬に一筋の
涙が流れている。

「菜穂美。
今日ここに俺達は、ほんまもん
の夫婦（めおと）になった。
教会での誓いの通りや。
これからも俺の、はに～でいて
くれな」

「（♀）はい。
わたしも、教会の誓いの通りです。
これからもずっと、うちのだ～りんでいて下さい」

どちらからともなく躙り寄る。
菜穂美の肩を抱き寄せて俺が言う。

「菜穂美、愛してるで」
「（♀）雅美さん。
うちも愛してます」

長いＫｉｓｓ。
・・・二人の夜は、今始まったばかりである。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）
雅（みやび）

第19話「Secret Woman」

第19話
「Secret Woman」

昨日の晩は、俺達にとって特別な日となった。
そして、次の日の朝・・・。

「ん？
何や鼻の穴がもぞもぞしよる。
ぶぁっくしょ～ん！！！」
「（♀）ああ、やっと起きたぁ。
おはよう、だ～りん。
外は、今日もエエ天気よ」
「ぶぁっくしょ～ん！！！
ああ。
おはよう、はに～。
おろ？
裸で寝とったから風邪引いたんかぁ？
いや、そんなはずあれへん。
アホは、風邪引かんはずや」
「（♀）くすっ。
何一人でボケとツッコミしてんのぉ？
何べん言うても起きひんからティッシュ丸めて鼻の穴コショコショて、やったんやんか」

「何やぁ。
そうやったんかいな。
そらすまんかったのぉ。
って、何すんねん！
人の鼻の穴や思て」
「（♀）だってぇ～、声かけても
なかなか起きてくれへんねん
もん」
「すまんすまん。
堪忍やで、はに～。
Ｃｈｕ」
「（♀）あぁん。
チューで、ごまかそうとする
しぃ～」
「アカンか？」
「ううん、もっと～」

それでは、リクエストにお答え
してお目覚めのＦｒｅｎｃｈ　Ｋｉｓｓ
今日は、少し濃厚なお目覚めの
Ｋｉｓｓである。

「さてと。
ほなら、シャワー浴びて朝食と
いきまひょか」
「（♀）うん。
ほな、一緒にシャワーしよ？」

一緒にお目覚めのシャワーが日課
になりそうである。

おやっ？
携帯が鳴っとる。
「おはようございます。
もうお目覚めでしたか？」
ジミーからだった。
「ああ。
さっき、鼻の穴コショコショて
やられて起きたとこや」
「朝から、ご馳走様です。（笑）
今日は、どちらのビーチへ
お連れしたらよろしいかと思い
まして」
「菜穂美は、ここの泳げる水族館
行きたい言うねんけどなぁ」
「ああ。
それでしたらもっと良いところ
がありますが？
イナラハンの天然プールは
ご存知ですか？」
「あぁ。
あの、ものごっつい坂登って
降りたとこやな？」
「はい、そうです。
あちらの方が景観が綺麗で
面白いと思いますが」
「ちょぉ、待ってや。
お～い、はに～。

ジミーが、イナラハンの天然
プール、どないや言うてくれて
るで」
「（♀）そこも、お魚さんと泳げ
んの？
それやったらエエけど」
「少なくともここの水族館よりは
エエと思うで」
「（♀）それやったら、そっちが
エエかな？」
「ジミー？
お聞きの通りやぁ。
ほなら、イナラハン連れてって
もらいましょか」
「かしこまりました」

朝食をとっているところへジミー
とエリーが入ってきた。

「おはようございます。
お部屋へ連絡したら繋がらりま
せんでしたので、こちらかな？
と思いまして」
「ああ、おはよう。
ジミー、エリー。
昨日は、おおきにな。
遅うまですすまんかったね」
「いえいえ。
とんでもありませんわ。
私たちこそ行き届きませんで」

エリーが涼しい目をして言った。
「あんたらは、朝飯は？」
「今日は、すませて参りました」
「おっと、ほな早よ食べんと
アカンな。
堪忍な。
ちょいとだけ待ってや」
「いえいえ。
ゆっくり召し上がって下さい」
「そしたら、なんぞ冷たいもん
でも飲んどいて」
「はい、ありがとうございます。
食事がお済みになられたら
知り合いのショップにご案内し
ますのでマスクやシュノーケル
、フィンなどをお求めになられ
たらよろしいかと」
「ああ、そやね」
「（♀）だ～りん。
そしたら、うち水着やら取って
くるわぁ」
「エリー。
菜穂美さんとお部屋までご一緒
して」
「（♀）エエよぉ～。
一人で大丈夫やから」
「いえいえ。
そうは参りませんわ。

それでは、菜穂美さん参りま
しょうか」
「そうや。
エリーにボディーガードして
もろたらエエわ」
「（♀）うん。
そしたらエリーさんお願い
します」

女二人は部屋に上がっていった。

「今日は、リムジンと言うわけに
参りませんので４ＷＤを持って
参りました。
車にクーラーボックスを積んで
ますので途中で氷と飲み物を
仕入れて参ります。
ビールは、クアーズでよろしい
でしょうか？」
「ああ、堪忍。
バドやったら吹いてまうかも
しれんよって」
「かしこまりました。
では、その様に」
「何やうちの嫁なかなか降りて
きよれへんなぁ。
何ぞあったんちゃうやろな？」
「ご心配なく。
手前のエリーは、あれでも
マーシャルアーツ（合気道）の

達人でして。
銃を持った輩でも叩きのめし
ますので。
それにナース（看護師）の資格
も持っておりますので万一の時
でも安心です」
「ほぉ。
そりゃ、すごいでんな。
ああ、やっと降りてきよった」
「（♀）だ～りん、お待たせぇ。
向こうで着替えるとこあれへん
かったらと思て下に水着着て
きてん」
「エリー、おおきに。
あんたの武勇伝聞かしてもろた
で。
合気道の達人やねんて？」
「いえいえ、達人だなんて。
海軍におりましたので」
「（♀）すごいわぁ～。
なんや、Ｇ．Ｉ．Ｊａｎｅみたいやん」
※作者注
Ｇ．Ｉ．Ｊａｎｅは、陸軍です。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の

ものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。

著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第２０話「お魚になった、ワ・タ・シ」

第２０話
「お魚になった、ワ・タ・シ」

「（♀）うわぁ、でかっ！
ここが、何ちゃら言う天然
プール？
飛び込み台まであるやんか」
「昔に来た時より随分と開けとる
なぁ。
わいが来た時は店なんぞ何も
あれへんかったのになぁ」
「（♀）世の中は、そんだけ進歩
してるちゅうことやね。
着替えるとこもシャワーもある
やんかぁ」

早速、俺たちは水着に着替え上に
パーカーを羽織る。
グァムの陽差しは俺たちが思って
いる以上に強い。
油断していると陽差しで本当に
火傷をすることがあるそうだ。

「（♀）だ～りん、お待ち～
どない？
うちの、この水着？」

エリーも、海軍上がりの引き
締まったプロポーションである。

「おわぁっ！
鼻血が・・・」
「（♀）だ～りん。
何言うてんの。（笑）
はいはい、ティッシュね」
「おお、そや。
はに～、日焼け止め塗らな」
「（♀）いや～ん。
そないに、うちの体触りたい
のぉ～？」
「あふぉ。
グァムのお陽ぃサン、舐めとっ
たら火脹れができるんやで」
「（♀）えぇ～？
エリーさん、ほんまですかぁ？
（；「｜「）」
「その通りですよ。
私達、現地のものでも油断する
と大変なことになります。
まして、菜穂美さんのように
白いお肌でしたら、きちんと
プロテクションしておかないと
本当に火傷しますよ」
「（♀）え゛ぇ～！
そら、知らんかった。
どないしょう。
そんなん、知らんもんやから

日焼け用のオイル持ってきて
もぉたぁ」
「そないなもん塗ったらガングロ
通り越してドえらいことやで。
心配しな。
さっきの店でちゃんとキツ～い
やつ買うてきといたから」
「（♀）あぁ～ん。
さっすが、うちのだ～りん。
Ｃｈｕ　！」
「ジミー、サンキュ。
教えてもろたおかげでエエ格好
できたわぁ」
「（♀）なんやぁ～。
入れ知恵に受け売りかいな。
ほしたら、だ～りん背中に
塗ってくれる？」
「ほいほい。
背中でも胸でも足でもどこでも
塗ったるでぇ」
「（♀）いやぁ～ん。
そないなこと言う子には金玉に
電撃やぁ～」

慌てて、股間を隠す俺。
皆、爆笑である。

マスクに、シュノーケル、フィン
をつけて水に入る。

「（♀）わぁ！
お魚さんがい～っぱいいてる。
わぁ～・・・」

菜穂美がはしゃいだ声を上げる。
しばし、俺たちはお魚気分に
なる。
水から上がった菜穂美が言った。

「（♀）すぐそこが海やってん
ねぇ。
でも、海の中こないして見たん
初めてやけど、すごいきれい
やねんなぁ」
「この辺りは所詮プールですが
沖に出てスキューバされたら
人生観が変わるかもしれない
ですよ」

エリーがクアーズを飲みながら
優しく言った。

「そや、はに～。
わいのパーカー、羽織っとき」
「（♀）おおきにぃ～。
だ～りんはエエのん？」
「面の皮と一緒で背中の皮も
厚いから大丈夫や」
「ああ。
先ほど買われた、Ｔシャツを

お持ちしてますのでこれを」
「おおきに、ジミー。
ところで、あんたらは結婚
してどれくらいやのん？」
「はい。
手前もエリーも軍におりました
ので、２８の時に結婚しまして
そろそろ２０年ですね」
「そろそろ２０年じゃなくて、
今年で２１年目でしょあなた
（ー~ー#）」

エリーが拗ねたように訂正する。

「へぇ～。
そしたら、ジミーもエリーも
わいより年上やんか。
すんません。
タメ口ききまして」
「いえいえ。
お気になさならないで下さい。
ボスに言わせるとわたしは
ヒヨっ子のＮｏ．３だそうです
から」
「いやいや。
何をおっしゃいますやら。
そしたら、Ｎｏ．２言う方は？」
「長の勤めに出ております。
お気になさらず今まで通りで
結構ですよ」

「そうですとも。
ボスのお兄さんの弟さんは
我々にとってボスと同じです
から」

エリーもジミーに続く。

「（♀）お話し中やけど。
ちょっと、失礼してエエか
なぁ？」
「おお？
どないしたんや？
腹でも冷えたか？」
「（♀）もぉ～ん。
ちょっと、お・し・っ・こ」
「はっきり言うやっちゃなぁ
（笑）
エリー。すまんけどついて
いったってくれますか？」
「もちろんです。
菜穂美さん。
トイレはあちらです。
ご案内しましょう」
「（♀）ごめんなさい。
ほな、ちょっと失礼して」

二人がビーチハウスの方へ歩いて
いった。

「それで、ジミーはどこの軍に

いてはったんです？」
「海軍のトムキャットに乗って
ました。
エリーが同じベースの医局に
おりまして」
「なるほど。
ほな、お二人共退役軍人さん
でっか・・・」

ジミーと話をしている時、菜穂美
の怒鳴り声が聞こえた。

「おお？
なんぞあったみたいやぞ」

俺たちは、声のした方に慌てて
駆けだした。

「菜穂美、どないしたんや？
大丈夫か？」
「（♀）いやなぁ、こいつらが
うちに一緒に泳ぎましょ言うて
手ぇ引っ張ってこうとしよって
ん。
うちら女二人やから舐められた
みたいやねん」

一人が大の字になって伸びて
いる。
水面を見ると二人の若い日本人が

浮いていた。

「（♀）何、しよんぢゃ！
このくそガキ言うてる間に
エリーさんが二人水に放り
込んで、一人を投げ飛ばして
まいはった」

少しばかり、俺は青筋が立って
いた。

「ジミー。
あの二人引きずり上げてくれる
か？」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ　！」

たちまち3人は俺の目の前に放り
出された。

「お〝ぉっ？
僕らぁ何、人の嫁に手ぇ出し
とんねん？
何震えとんぢゃあ！！
人の話聞く時は正座や！

２００６　ｂｙ　Ｍｉｙａｂｉ　Ｒａｉｋｏｕ

今度、こないなことしよったら
エンコ、詰めさすからのぉ」
「すいません。

ごめんなさい。
許して下さい。」
「おまえら、それが許しを請う
態度か？
ごるらぁ、パスポート見せぇ。
はよぉ、せんかいっ！
ジミー、こいつらのヤサ控え
とってくれるかぁ？」
「Ｙｅｓ ｓｉｒ ！」
「今日は、許したる。
今度見つけたらタモン湾に沈め
たるからな。
よぉ、覚えとけっ！
何ぞ、言いたいことあるか？」
「いえ。
すいませんでした」

「（♀）せやけど、あないに
怒っただ～りん見たん初めて
やわぁ」
「当たり前やろぉが！
大事な、はに～に何ぞあったら
誓いの言葉反古にしたことに
なるやろぉが？」
「（♀）うち、嬉しいわ。
うちのことほんまに大事に思て
くれてんねんな」
「まあまあ、ご無事でなにより
でした。
まあ、彼らもこれに懲りて

少しは自重するのではないでしょうか？」
「それやったら、ええけどな。はに～。
ほな、もう一泳ぎしよか？」
「（♀）うん」

俺たちは天然プールに飛び込んだ。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第21話「Ｇｕｎ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｓｐｏｒｔｓ　Ｃｌｕｂ（前編）」

第２１話
「Ｇｕｎ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｓｐｏｒｔｓ　Ｃｌｕｂ
（前編）」

昨日は、お魚になった俺達だった
が今日はマイケルのクラブを
訪ねることにした。
Ｇｕｎ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｓｐｒｏｔｓ　Ｃｌｕｂは、
タモン湾を望む小高い丘の上に
ある屋外型のＳｈｏｏｔｉｎｇ　Ｒａｎｇｅで
ある。
Ｋｅｎの運転するジミーのランド
クルーザーが牧場を模したゲート
を潜っていく。
車を降りると乾いた音がこだま
している。

拳銃の発射音は意外と乾いた音が
する。
日本のテレビのような音はしない
ものである。
（×）ドキューン、バキューン
（○）パン、ドン
もっとも、口径によって音は多少
変わってくるものであるが。
また、口径と一口に言うがどれ
くらいかと言うことを知る人は

意外と少ない。

――

【一般的な銃における口径】

拳銃などにおいて、ｎ口径とは、
銃口の内径が「１００分のｎ」
インチであることを意味し、
独立の単位として存在する。
１インチはおよそ２５．４ｍｍ
（＝２．５４ｃｍ）である。
例えば、４０口径は約１０ｍｍで
ある。
又、５０口径は別名「半インチ」
（１２．７ｍｍ）となる。
一般によく耳にする、２２口径と
言うのは銃口の内径が
５．５８８ｍｍ、３２口径で
３．１２８ｍｍ、４５口径で
１１．４３ｍｍとなる。
４４マグナムと言うと
１１．１７６ｍｍのマグナム弾、
３５７マグナムと言うと
９．０６７８ｍｍのマグナム弾と
言うことになる。

因みにマグナム弾と言うのは、
同一口径の平均的な実包と比較
して、装薬量を増やした強装弾、

及びそれらを使用する銃器の名称
並びに商標である。
酒類の増量ボトルを指す言葉
「マグナム」を語源としており、
一般にはケース（薬莢）を通常より
長くしたり、ネックの角度を強く
したりすることで、薬莢の内容量
を増加させて、より多くの火薬が
入るようにしている。

出典：
フリー百科事典
ウィキペディア（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）

――

連絡をしてあったので車の音を
聞きつけてマイケルが迎えに出て
きた。

「いらっしゃいませぇ～。
ハマちゃ～ん&菜穂美さ～ん」
「マイケル、今日はよろしゅう
頼むでぇ。
菜穂美は、全くの初めてや
から」
「（♀）マイケルさん、
よろしゅうお願いしますね」
「まっかせなさ～い。
では、規則に則りビデオを見て

もらいましょうね～。
拳銃の基本をお勉強してもらいますね～。
それから、実際に弾いてもらいましょうかねぇ。
ハマちゃ～ん、テッポーダマの感覚を呼び戻しなさ～い。
わはははは」

ビデオは、ちゃんと日本語で作られている。
曰く、銃口は人に向けるな。
曰く、弾を込める時は銃身を下に。
その他諸々・・・・・。
And so on.

「はい。
これ、ゴーグルとプロテクターね。
プロテクターは、各自で調節してね。
ゴーグルは、大きかったり小さかったりしたら言ってねぇ。
サイズを変えてあげるからねぇ」
「う～んと、ハマちゃんは何から行く？
32口径？45口径？

軽～く、ウォーミングアップね。
菜穂美さ～んは、２２口径にしましょう。
例え、数ミリの違いと思うなかれぇ。
手首痛めたりしたら
ハマちゃ～んに申し訳な～いからね」

ここ、マイケルのクラブでは実包を使っている。
リロードと言って再生した弾丸や火薬の量を減らして観光客用にと言うことはしていない。
舐めてかかると怪我をするわけである。
だから、料金は少々高い・・・ｏｒｚ。

「さて、それではレンジの方に行きましょうね。
後で写真撮ってあげるからね。
Ｌｅｔ'ｓ　Ｇｏ　！」

皆で、ぞろぞろと屋外のレンジへ出て行く。

「ハマちゃ～ん。
あんたは勝手に一人でやってなさ～い。

やり方、思い出したでしょ？
菜穂美さ～んは、わてが責任
持っていっちょ前のテッポー
ダマにしてあげるからね」

俺は、手始めに　Ｇｌｏｃｋ３２を手に
取った。
弾倉を外し、弾を装填していく。
プロテクターを耳につけゴーグル
をかける。

「ジャキーン」

弾を込めた弾倉を装填し遊底を
引く。
この時、人差し指は引き金から
外し、銃口は天を向ける。
ターゲットは、遥か彼方に霞む。
脇を絞り静かに銃口を天から
目の高さに持ってくる。
この時銃身が下がり気味になる
ので心持ち上に上げる。
息を止め、静かに引き金を引く。

「ドン！」

銃声と共に銃身がかすかに跳ね
上がる。
掌と手首に懐かしい刺激が甦る。
遊底がスライドし、薬莢が飛んで

いく。

「ドン！」
「ドン！」

続けて引き金を引く。
焼けた薬莢が次々と飛びだし、
音をたてて転がる。

「Ｏ．Ｋ．」
「Ｇｏｏｄ　！」

スコープで着弾点を見ていた
インストラクターが叫ぶ。
隣では、菜穂美がマイケルの
手ほどきを受けている。

「イイですかぁ？
まず、ラッチを押しま～す。
そしたらぁ、弾倉が横に出て
きま～す。
銃口を下に向けて～。
そうそう。
はい、弾を込めましょう。
全部で６発入りま～す。
Ｏ．Ｋ．ね。
弾倉を元に戻してぇ～」

菜穂美が真剣な顔をして聞いて
いる。

ゴーグルをかけ、プロテクターをつける。

「は～い、銃口を天に向けてぇ。
脇を絞ってぇ、銃身を目の
高さへ～
撃鉄を親指で起こしてぇ～
息を止めるっ！
Ｆｉｒｅ　！」

「パン！」

乾いた銃声がする。

「Ｏ．Ｋ．
イイですよぉ。
も一度、撃鉄起こしてぇ～
息止めて～、Ｆｉｒｅ　！
Ｏ．Ｋ．
菜穂美さ～ん、これであなたも
立派なテッポーダマで～す」

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」

です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第22話「Gun Shooting Sports Club（後編）」

第２２話
「Ｇｕｎ Ｓｈｏｏｔｉｎｇ Ｓｐｏｒｔｓ Ｃｌｕｂ
（後編）」

俺は、次に Ｓｍｉｔｈ ＆ａｍｐ； Ｗｅｓｓｏｎ Ｍ６２９
を手に取った。
これは、回転式で４４マグナムを
装填する。
弾を６発込めて再び銃身を天に
向ける。
Ｍ６２９は、ダブルアクションなので
撃鉄を起こす必要はない。
回転式であるが引き金を引けば
撃つことができる。
脇を絞り銃身を目の高さへ。
こいつは、銃身が長いので気を
抜くと銃口が下がっていく。
また、マグナム弾を撃つ時は
グリップをしっかり握り手首を
柔らかくしていないと発射の
衝撃で銃を飛ばしてしまうことが
ある。
逆に肩に変に力が入ると肩を
痛めてしまうこともある。
日本人にはＤｉｒｔｙ Ｈａｒｒｙのように
片手打ちなどできない。
肩を脱臼するのがオチである。

※体格、筋肉トレーニング次第
では、可能です。

息を吸い込み、止める。
引き金を引く。

「ドン！！」

Ｇｌｏｃｋ３２　よりも強い衝撃が手首に
くると同時に銃身が大きく跳ね
上がる。
これは、連射をすると危険だ。
１発ずつ間をおいて撃っていく。
さすがに４４マグナム弾だと着弾
が大きくぶれる。
菜穂美も６発撃ち終え、次の弾を
込めている。
マイケルは、後ろで見ているだけ
である。

横のレンジでは、ジミーが金色の
Ｂｅｒｅｔｔａ　Ｂｒｉｇａｄｉｅｒ　を連射して
いる。
さすがに退役軍人だ。
伸びた腕は、微動だにしない。
この銃は、グリップが大きいので
しっかり握れば安定感は絶大な
イタリアの名銃である。

Smith & Wesson M629を置き、
Colt Government Commander を
手に取る。
黒光りする45口径の名銃だ。
俺は、この銃が好きだ。
なぜ？
と、言われても答えに困るので
あるが。（^＿^；）

「（♀）うちも、そんなやつ
撃ってみたいなぁ」

菜穂美がオートマチックの銃に
興味を示す。

「マイケル？
菜穂美がこない言うとるけど
Glock32 撃たしてもエエか？」
「O.K.
ほな、わいの出番やな。
菜穂美さ〜ん、今度はさっきの
と違て手首に衝撃がかなり
きま〜す。
気合い入れていきまっしょい」

俺は、全弾装填した
Colt Government Commanderを
構える。

「ドォン！」

マグナム弾とはまた違った轟音が
響く。
焼けた薬莢が飛んでいく。

「ドォン！」
「ドォン！」
「ドォン！」

三連射する。
心地よい衝撃が手に加わる。
隣では、菜穂美がＧｌｏｃｋ３２に装弾
している。
弾倉を込める。

「さ～て、菜穂美さ～ん。
今度のはさっきと違って薬莢が
横から自動で排出されま～す。
気をつけてくださ～い。
弾倉入れましたね？
Ｏ．Ｋ．
人差し指は引き金から離しま
しょう。
そうそう。
片手で銃口を上に向けて～
遊底を下にスライドさせて～
Ｏ．Ｋ．
Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ.
左手をし～っかりとグリップ
してぇ。

後はさっきと同じ。
息を吸ってぇ止めて～
Ｆｉｒｅ　！」

「ドン」

「（♀）きゃあ！」

銃口が大きく跳ね上がる。

「Ｏ．Ｋ．
大丈夫、大丈夫。
心配な～い。
はい。
も一度構えて～
おぉっと、肩に力入り過ぎ～
リラ～ックス、リラ～ックス。
はい。
も一度構えて息を吸って～
止めて～
Ｆｉｒｅ　！」

「ドン」

今度はうまく撃てたようだ。

「菜穂美さ～んは、初心者やから
連射は禁止ですよ～。
Ｏ．Ｋ．　？」
「（♀）オッケ～」

「菜穂美さ～ん。
あなた、筋がイイですねぇ。
ハマちゃ～んより上手です」

菜穂美には、マイケルの声は
もう聞こえていないようである。
俺達は、手に腕に受けるオート
マチックの衝撃を楽しんでいた。

「O．K．
ちょいと休憩しましょう」

しばらくして、マイケルが皆の
肩を叩いてまわる。

「皆さ～ん、中で冷たいものでも
どうぞ～」
「久しぶり、ちゅうか何ちゅうか。
たまらんのぉ、この衝撃は」

俺は、心地よい余韻に浸りながら
コーラを呷った。

「（♀）だ～りん。
うちもハマりそうやわぁ」
「ハマちゃ～ん。
菜穂美さ～ん、あんたより
筋イイね～。
はっはっは」
「（♀）へへ。

うちも大したもんやん。
だ～りん。
次、勝負しよか？」
「やめとき。
１０年早いで」
「（♀）やっぱり？
ほなやめとこ。
これって、意外と汗かくもんや
ねぇ。
今、気ぃついたけど汗がすごい
わぁ」
「そやろぉ？
アドレナリンが全開になるから
なぁ」
「ハマちゃ～ん。
Ｍ－１６にしますか？」
「いや、今日はやめとくわ。
ほな、もう一通り撃ったら
帰ろか」
「（♀）うん、わかった～」

俺たちは、再び外のレンジに
向かった。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第23話「In the sea of Guam “Under Water World”」

第23話
「In the sea of Guam
“Under Water World”」

俺たちのグァム滞在もそろそろ
1週間になる。
昨日と一昨日の2日をかけて
菜穂美がスキューバダイビングの
講習に行った。
認定証（C－Card）を取るのが目的
ではない。
安全に海の中をお散歩できるよう
に必要最低限のこと。
例えば、マスククリアとか、
シュノーケル・クリアや
レギュレータークリア等の技術的
なことを習い、減圧症や潜水病、
窒素酔い等、命に関わるところを
学習した。
後は、Own your risk である。
俺は、Advanced Openwater Diver
として認定されている。
が、悲しいかなブランクがある。
それで、俺もその講習に参加を
したわけである。
菜穂美もまったく泳げないと言う
わけではく、水に対する恐怖心も

ないので二人とも、3日のところを2日で終わったわけである。

「（♀）あの空気タンク（酸素ボンベではない）ってやつ。見かけによらず重たいんやなぁ。

うちみたいな、か弱き乙女にはつらいわぁ」

「そやな。

水の中ではそないに感じへんけどな。

わいがアドバンス取った時は気合いの連続やったなぁ。」

「（♀）ふ～ん、そうなんやぁ。だ～りん？

一個、質問があんねんけど？」

「なんや？」

「（♀）何か、あの空気吸うてたら、すんごい喉渇くねんけど何で？」

「それはな、単純にあの空気が高圧で乾燥してるからなんや。湿気があると、高圧のかかるタンクの内側が錆びて大変に危ないんや」

「（♀）あぁ、なるほど～。

水ん中潜るねんから喉渇いたら水あるやんと一瞬思てんけど海の水は塩水やからなぁ。」

「そう言うこっちゃな。
まあ言うても1時間も潜って
へんねんから我慢せんとしゃあ
ないわなぁ。
それとなぁ。
気ぃつけんとあかんことが
あるんやぞ」
「（♀）何？
鮫に気ぃつけとか？」
「それもあるけどな。
海ん中はな、美しいものには
毒があるっちゅうてなオニ
ダルマオコゼとかミノカサゴ
とかヒレに毒持っとるのがおる
からな。
うっかり触って毒にやられたら
ちぃ～と辛い目に遭うで」
「（♀）そうなんかぁ。
ほな、あのちぃちゃいけど
可愛いクマノミさんとかも？」
「いや、あいつは大丈夫や。
オコゼとカサゴにエイに
イソギンチャク、クラゲ。
あと、ウニにヒトデやな。
それから、珊瑚もあかんぞ」
「（♀）いや～ん。
そんな、ようさん覚えてられ
へんわぁ。
だ～りんの後ろついていくから
しっかり守ってな」

「そやな。
ほな、お手々繋いで行こか？
それが一番安心やな。
要はな、水の中では何も触るな
取るな言うこっちゃ」
「（♀）ほな、うちしんどなった
ら言うから引っ張っていって
な」
「そらぁ、無理な相談やなぁ」
「（♀）えぇ～？
なんで、そんな冷たいこと言う
のぉ～？」
「考えてみ？
水の中では、言葉がしゃべれ
な～い。
う～ん、残念。
切腹！」
Ｌｉｋｅ　ａ　Ｙｏｕｋｕ　Ｈａｔａ．　ｗｗ
「（♀）うわぁ～、ふるぅ～
でも、言われてみたらそや
なあ。
うち、しんどなったらどない
したらエエん？
それとか、空気なくなったり
とかしたら・・・」
「大丈夫や。
せやから、お手々繋いで行こう
言うてるやないか。
それやったらわいが引っ張った
ることもできるし安心やろ？」

「（♀）あぁ、そっかぁ。
横に、だ～りんがいてんね
やぁ」
「そうでっせ、忘れんといてや。
あとなぁ、運がよかったら
マンタ（イトマキエイ）が見れる
かもしれんでぇ」
「（♀）それは、危ないやつと
ちゃうの？」
「尻尾が危ないかなぁ？
せやけど、わいらが近づいても
我関せずでヒ～ラヒ～ラと
どっか行ってまいよるわぁ」

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第２４話ＭＩＳＳＩＯＮ　ＩＭＰＯＳＳＩＢＬＥ，　Ｃｏｄｅ　１０－２５　Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ．（前編）

第２４話
「ＭＩＳＳＩＯＮ　ＩＭＰＯＳＳＩＢＬＥ，
Ｃｏｄｅ　１０－２５　／　Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ．
（前編）」

Ｇｕａｍ島滞在が１０日あまりを
過ぎた頃俺も菜穂美も日焼けが
落ち着き、やや褐色の肌を持つ
現地の人達と変わらないように
なってきた。
さすがに面の皮の厚い俺もＧｕａｍの
陽差しに肌を焼かれ、松崎しげる
のような顔になってきた。（笑）

「やっと、日焼け落ち着いて
きよったなぁ」
「（♀）ホンマやね。（笑）
最初、だ～りんに陽差しの
キツさのこと聞いた時半信半疑
やったけど身に染みてよう
わかったわぁ。
今は、うちと安室ちゃんと
やったらどっちが黒いねん？
ちゅう感じやね」
「今やったら、十分勝ってるで。
ガングロはに～も、好きやで」
「（♀）へへ、やったぁ！

安室ちゃんに勝ったぁ！
ところで、だ～りん。
今日のご予定は？」
「そやなぁ・・・
島の南の方に史跡が固まっとる
んで、そこいらを辿りながら
タロフォフォ川を上っていく
アドベンチャーリバークルーズ
言うのに行ってみよか？
どないや？
海ばっかりでもええねんけど
グァム島の歴史を辿るちゅう
のも面白そうやで」
「だ～りん。
ほんまにＧｕａｍのこと好きやねん
なぁ。
よぉ、あちこち知ってること。
ス・テ・キ」

グァム島政府観光局のホーム
ページによると・・・

グアムが世界に知られるように
なったのは、
１５２１年３月６日に世界一周
航海の途にあったマゼランが
Ｇｕａｍ島を発見し、ウマタックに
上陸したことがきっかけでした。
１５６５年には、スペインが統治
を宣言し、それ以降３３３年に

及ぶスペインの影響は、現在もチャモロの風俗、習慣、宗教、生活等に根強く残っています。カトリック教が根付いていったのも、この頃からです。

スペイン統治が始まってから３３３年が経った１８９８年アメリカとスペインの戦争中に、Ｇｕａｍはアメリカの領土となりました。
これは、１９４１年に日本軍が占領するまで続きました。
１９４１年１２月１０日から始まった日本軍による占領は１９４４年にアメリカ軍が奪還に成功するまでの２年と７ヶ月の間Ｇｕａｍは大宮島と呼ばれていました。
１９４４年７月２１日にアメリカ軍がグアムを奪還し、１９５０年にアメリカの自治属領（準州）となり現在に至ります。

俺達は、いつものようにジミー達と合流した。

「今日は、どちらの方へ参りましょうか？」

「ジミーお薦めのグァム島南部
史跡の旅、言うので頼んます」
「わかりました。
アドベンチャーリバークルーズ
も入れておいてよろしいのです
ね？」
「コースは、お任せしますわぁ」

突然、携帯が鳴った。
おや？
志水の叔父からではないか。

「おお、浜田はん。
もう、出発しはりましたか？」
「いいえ。
今、ジミーと行くとこを打合せ
しとったとこですわぁ」
「夕方から、ちぃとつき合うて
ほしいとこができよったん
です。
いやね、アメリカ海軍さんの
ベースちゅうか官舎で知り合い
がパーティーしはりますねん。
金山の兄貴の、ご指示でちと
顔つなぎしとってほしいんです
わぁ」
「え？
義兄からの指示？
何ですの、それ？」
「まあ、詳しいことは夕方会うた

時にお話ししまっさ」
「はあ、わかりました。
菜穂美は、どないしたら？」
「ああ。
わても、和美連れて行きます
んでお連れして下さい」

海軍基地へ行くのはよいのだが
義兄の指示とは、何やろう？

「おおっとぉ。
うちの兄ちゃん何ぞ企んどる
なぁ？
変なこと言うてきたらお馬さん
に蹴りに行ってもらわなあかん
わぁ」

志水の叔父が大笑いしながら
言った。

「人の恋路を邪魔する奴はちゅう
訳でんな。
わはははは。
ほな、６時にホテルのロビーで
会いましょか。
パーティー言うてもタキシード
は、いりまへんよって。
アロハとスラックスでよろしい
で」
「はい、わかりました。

それでは、１８時にホテルの
ロビーで。
ほな、ジミー。
お聞きの通りやよって時間配分
の方だけ、あんじょう頼み
ます」
「大丈夫ですよ。
予定しているコースですと
遅くとも５時までにはホテルに
戻れますから」

俺達は、ランドクルーザーの方へ
歩いていった。
Ｐ．Ｉ．Ｃ．のアクティビティーは、
今日も大盛況である。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。
頼光（らいこう）　雅（みやび）

第25話MISSION IMPOSSIBLE, Code 10-25 Mr.Marshall.

第25話
「MISSION IMPOSSIBLE,
Code 10-25 / Mr.Marshall.
（後編）」

「なんやろなぁ？
義兄さんの指示て？」

タロフォフォからの帰りに俺は
呟いた。

「ジミー。
何ぞ、聞いてまへんか？」
「わたしは、特に何も聞いていま
せんが・・・」

何か含みのあるようなジミーの
答え。

「まぁ、エエわぁ。
ジミー、その海軍基地言うのは
何処(いずこ)に？」
「はい。
アガットを少し北に行きますと
アプラ湾に出ます。
ここにアメリカ海軍太平洋艦隊
の基地があります」

「（♀）その海軍基地言うたら、
航空母艦とか駆逐艦とか、いて
るん？」
「いえいえ、空母はオアフの方
ですね。
ここは、補給艦や潜水艦が
主です」
「（♀）へぇ～。
潜水艦、いっぺん中見てみたい
なぁ～」
「潜水艦は、国家機密の固まり
ですので選ばれた人でないと
中には入れないと思いますよ。
我々が現役の時でも入れません
でしたから」
「（♀）へぇ～。
大層やねんなぁ」

「潜水艦にお乗りになりたいの
でしたら
『アトランティス』と言う観光
潜水艦が就航していますが？
ダイビングとはまた違った海中
散歩ができますよ」
「（♀）だ～りん。
うち、そっちで手ぇうっとく
わぁ」
菜穂美は、潜水艦に興味を引かれ

たようだ。

「今、何時かいな？
なんやぁ、まだ１６時かいな。
意外と早よう帰ってこれたんや
なぁ」
「そうですね。
６時にお迎えに参りますので、
それまでゆっくりなさったら
結構かと」

ジミーは俺達をホテルで降ろすと
一旦帰って行った。

「はに～、そしたら部屋帰って
シャワー浴びて軽く何ぞ食べよ
か」
「（♀）もぉ～。
相変わらず色気より食い気や
ねんから。（笑）
それやったら、うちを
食・べ・て」
「いただきま～す」

部屋に戻った俺たちは、いつもの
お約束？
バスルームへ・・・
（（（（（；＾＿＾）（＾＿＾；））））
・・・合体

「志水の叔父さん、お待たせしました」
「いやいや、わてらも今着いたとこですわぁ。
これが、金山の兄貴からの伝言です」

清水の叔父が俺に1枚の紙切れをくれた。

『10－25．
Ｎａｖａｌ　Ｂａｓｅ，
Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ．』

と書かれてあった。

「（♀）何～、これ～？
いみふ～（意味不明）」

横から菜穂美が覗き込んで言う。
これは、テンコードだ。
俺には意味がわかった。
テンコード（Ｔｅｎ－ｃｏｄｅ）とは、
１０－ｘｘ　のようにして使うコールサインである。
ハイウェイパトロールやＣＢ無線などで使われていたものである。
俺も仲間内で時々使っていたことがある。

マイケルやロイなども知っている。

１０－１　受信不良
１０－２　受信良好
１０－３　送信を中止せよ
１０－４　了解
１０－５　中継頼む、する
１０－６　多忙中待て
１０－７　閉局
１０－８　開局
１０－９　更にどうぞ
１０－１０　送信終わり
傍受に入る
１０－２５　・・・と交信
出来るか？、
出来る

等のようにして１０－１から１０－９９までのそれぞれに意味がある。

※以前、テレビで
「緊急指令１０－４・１０－１０」と言う番組がありましたっけ？

俺がよく使っていた１０－４と言うのは「了解」の意味がある。

１０－２５．
Ｎａｖａｌ　Ｂａｓｅ，

Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ．

平文にすると

ｐｌｅａｓｅ　ｃｏｎｔａｃｔ　ｔｏ
Ｎａｖａｌ　Ｂａｓｅ，
Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ

となる。

「志水の叔父貴。
このＮａｖａｌ　Ｂａｓｅ，Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌと
言うのは誰ですの？」
「アメリカ海軍アプラ基地装備品
管理責任者のマーシャル大尉と
言う人で、これから会いに行く
相手ですわぁ」
「何のために？」
「顔を繋ぐんが今日の目的です。
ほな、行きましょか」

今一つ、よくわからないまま俺は
志水の叔父とホテルを出発した。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第２６話「アプラ海軍基地　（Apllａ　Ｎａｖａｌ　Ｂａｓｅ）」

第２６話
「アプラ海軍基地
（Ａｐｌｌａ　Ｎａｖａｌ　Ｂａｓｅ）」

俺達の乗った志水叔父のリムジンは、タモンを出てタムニングからマリンドライブに入り一路アプラを目指す。

窓の外には綺麗な夕陽が見える。
何度見ても神秘的な光景だ。
アプラ湾の端、立哨の立つゲートが見えてきた。
ゲートの守衛にジミーが二言三言告げる。
守衛が電話をかけている。
程なくゲートが開き、俺達は基地の中へと入っていった。

「（♀）へぇ～。
　海軍基地て、こんなんやってんやぁ～」

感心する菜穂美の声の横を迷彩柄のシャツの一団が走っていく。
俺も海上自衛隊の基地内に入ったことはあるが、自衛隊と軍隊。

雰囲気が全く違う。
車が1軒の官舎の前で止まった。
屋内からは、ビートの効いた音楽が、流れてくる。

「さぁ、着きましたで。
今日は、顔つなぎですよって
堅苦しいことは、なしっちゅう
ことなんで」

何の顔つなぎなのかよく判らないまま俺達は車を降りた。
庭の方へまわるとパーティーは、始まっているようだ。

「は～い、志水さ～ん。
お久しぶりですね～」
「おぉ、フィル。
久しぶりやぁ。
元気でしたか？
フィル、こちらが甥っ子の
マサ・浜田です」
「Ｎｉｃｅ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　！
Ｐｈｉｌｉｐ　Ｍｏｒｒｉｓ、フィルと呼んで下さい」
「初めまして、フィル。
マサ浜田です。
マサと呼んで下さい。
妻のナオミです」
「おお、かわいい奥さんですね～

Ｎｉｃｅ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　！
ナオミさ～ん」
「初めまして。
妻のナオミです」
「さぁ、こちらにどうぞ。
大尉がお待ちですので」

芝生を踏みしめ一際賑やかな集団の輪の方へ進んでいった。
バカ騒ぎをしている集団の中で一際目立つ男がお目当ての人物のようだ。
モーリス少尉が近寄っていき耳打ちする。
背格好がジミーくらいの恰幅のよい、いかにも叩き上げと言う風情の男が近寄ってきた。

「ジョージ。
今日は、うちの甥っ子夫妻を連れてきましたで」
「おお、志水さ～ん。
お久しぶりねぇ。
この人が新しい００７（ダブルオーセブン）ですかぁ？
がははははは」

少し、酒に酔っているようだ。
「初めまして。

Ｍｒ．Ｍａｒｓｈａｌｌ」
「Ｃｈ！　Ｃｈ！　Ｃｈ！
ジョージと呼んで下さ～い。
あなた、中々良い体してます
ねぇ。
Ｕ．Ｓ．Ｎａｖｙに入りませんかぁ？
がははははは」

なんや、こいつ？
「君、良い体してるね。
自衛隊に入らないか？」
のギャグを知ってるのか？

「和美。
ちょい菜穂美さんを頼むわぁ」
「はい、わかりました。
菜穂美さん。
向こうで何か、よばれましょ
か？」
「（♀）ほな、だ～りん。
向こうで何ぞ食ってくるわぁ」

雰囲気を察した菜穂美は大人しく
和美姐さんとテーブルの方へ
向かっていった。
人払いをしてあるのか、俺達の
周りには誰も近づいてこない。

「ジョージ。
今度の荷物の運搬はこのマサが

仕切りますよって、よろしゅうに。
マサは、金山の兄貴の弟ですよってね。
間違いの心配はありませんで」
「そうですかぁ。
あんじょう頼んまっせぇマサ～がははははは」
「？？？」

俺には、何のことやらさっぱりわからない。

「半年に1回、ここを起点に横須賀へ銃火器が入るんですわぁ。
海軍さんのね。
そのうちの、なんぼかをうちがいただいてますねん。
マサやんには、横須賀でその荷受けをしてもろてうちっ側の荷捌きへ運んでもらう指揮を執ってもらお、ちゅうわけですわぁ」
「へ？
つまり、わてのデビュー戦？
ちゅうわけですか？」
「ピンポーン　！」
「Ｄｉｎｇ　！　Ｄｏｎｇ　！」
「まあ、金山の兄貴の話では

ヘタレも卒業なすった言うこと
なんで卒業記念言うとこです
かな？」

何か、いきなり大きな話が舞い
込んできたようだ。
つまり、金山の身内として内外に
実力を示せと言うことのようで
ある。

「差し当たり日本に帰られる前に
このマーシャルはんと、打ち
合わせしてもろて横須賀で
受けとるもんの段取りをして
ほしいんですわぁ」
「わかりました。
そしたら、いつ打合せに来たら
よろしんで？」
「明後日１１時に来て下さ～い。
それが、終わってからＬｕｎｃｈ
一緒に食べまっしょ～う」
「わかりました。
それでは、明後日の１１時に」

マーシャル大尉が大きな右手を
差し出してきた。
お互いに握手を交わし菜穂美達の
いるテーブルの方へ向かった。

俺の中の止まっていた歯車が今、
音を立てて動き始めたようだ。

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第27話「親の血を引く兄弟よりも・・・　（前編）」

第27話
「親の血を引く兄弟よりも・・・
（前編）」

「それでは、ジョージ。
11月20日に横須賀で会いましょう」
「O.K. Masa.
See you later,
at Yokosuka.
Bye bye」

マーシャル大尉と詳細を詰め、
俺はアプラ海軍基地を後にした。
グァムに来て初めて、菜穂美とは
別行動だった。
この日、菜穂美はエリー、リンダ
達とお買い物である。

「浜田さん。
お疲れ様でございました。
夕方からサンド・キャッスルで
ボスが席を用意しております」
「なんですか？
そのサンド・キャッスル言う
のんは？」
「グァム随一のレビューが見れる

シアターレストランです」
「ほほぉ。
ほな、宝塚歌劇みたいなもん
でんな？」
「宝塚歌劇と言うのは自分はよく
知りませんが、ラスベガスの
ショーのようなものとお考え
いただければと」
「なるほど。
菜穂美も喜びよるやろな」
「そうですね。
自分達も、そうそう行くことの
できる所ではありませんので」

どうやら、高級キャバレーと
シアターレストランが一緒に
なった所のようである。
あっと、言う間にホテルに帰って
きた。

菜穂美達も丁度帰ってきたところ
のようだ。
両手に、たくさんの袋を提げて
いた。

「エエもん、よ～さん買うてきた
みたいやのぉ」
「（♀）だ～りん。
ペアウォッチのエエのんあった
から買うてきたぁ」

「ほぉ、ブルガリやないか。
しかも、これめっちゃ好みや」
「（♀）よかったぁ。
コンビのんがなかったから
どないかな？と思てんけど」

菜穂美は、ほんまにエエ嫁やと
つくづく思う俺だった。

「今日の晩飯はラスベガスばりの
ショー見ながらやで」
「（♀）え？
ほんま？
うち、いっぺんそないなん見て
みたかってん」
「それでは、６時にお迎えに参り
ますので」
「ああ。
毎度毎度、すんまへんね」
「いえ。
それでは一旦失礼します」

ジミー達と別れて俺達は部屋に
戻った。

「（♀）だ～りん。
話はうまいことといったん？」
「そやな。
しかし、義兄さんにあんじょう
乗せられてしもたなぁ」

「（♀）グァムで、なんぞあると
思とったけど。
まさか、だ～りんのデビュー戦
やとは思わなんだ。
しっかり、気張ってや。
まい、だ～りん」
「気張らいでか」
「（♀）ほな、だ～りん。
シャワーしよっ」
「そやな。
やっぱぁ、緊張してごっつう
冷や汗かいたし」

シャワーと言えば、お約束。
いつのまにやらバスルームには
甘い声が・・・（笑）

「マサやん、お疲れさんでした。
あんじょういったみたいやな」
「はぁ。
せやけどむっちゃ冷や汗かき
ましたで」
「ははは。
まあ、今宵はゆっくりとショー
を楽しみながら旨いもん食い
ましょ」

俺たちは、サンド・キャッスルの
一番よい席でラスベガス仕込みの

ショーやイリュージョンを心置きなく堪能した。

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第２８話「親の血を引く兄弟よりも・・・　（後編）」

第２８話
「親の血を引く兄弟よりも・・・
（後編）」

「さて、ほな次行きましょか。
マサやんのデビューを祝って
もう一軒、店を用意してます
ねん。すぐ近くですよって
ブラブラ歩いていきましょか」

ジミーとＫｅｎ、初めて見る
二人の若者がさり気なくガードの
ポジションにつく。
ふと、先の方を見ると中年の
カップルが酒に酔った若者の
グループに何やら難癖をつけられ
ているようだ。

「こら～、エロ親父。
何、でっかいつらしてよ～
若い子連れて歩いてるんだ
よ～」
「わたしは、何も君たちに迷惑を
かけた覚えはないが？」
「おっさんがよ～、若い女の子を
連れてるのが迷惑だってんだ
よ～」

見れば、年の差カップル。
（俺も人のことは言えないが）
女性は、鋭い目で若者を睨んでいた。
その紳士の一言が若者達の癇に障ったのか一人が殴りかかった。
その紳士は、かなりの場数を踏んでいたようである。
女性を静かに後ろにやると殴りかかった若者に鋭いパンチを浴びせた。
鼻血が吹き出した仲間を見て逆上した仲間がナイフを抜くのが見えた。
しかし、臆することなくその紳士は身構え、

「君らなぁ、そんなもん出してきたらこっちも手加減できないよ。
やめなさい」

と腹に響く声で言った。
尚、逆上した若者達は一斉にナイフを構え紳士に突きかかっていった。
一人対五人。
二人までは叩き伏せたが三人目のナイフが紳士の脇をえぐった。

後ろに下がっていた女性が声にならない声を上げる。

「ジミー！
Ｋｅｎ！」

俺は、二人を促し紳士の元へと駆け寄った。
Ｋｅｎが紳士を助け起こす。

「おぉ？！
僕らぁイナラハンでうちの嫁に手ぇ出そうとした子らやないか？
何、また悪さしとるんや？」
「なに～？
ああ、あの時の。
今日は、あの時の礼させて・・・」

若者は最後まで言葉を続けることなく俺の蹴りを受けて吹っ飛んでいった。
立ち上がろうとした頭をめがけて回し蹴りが入る。
歯が折れて飛んでいくのが見えた。
残る四人が一斉に俺に斬りかかろうとした。
その時・・・

「ドン」

ジミーの撃った鈍い銃声が響く。
肩を撃たれた若者が吹っ飛ぶ。
ひるむ二人に蹴りを浴びせ連続
して拳を繰り出す。

「Ｈｅｙ Ｓｔｏｐ ！」

駆けつけた警官が銃を構える。
ジミーが警官に何か言うと駆け
つけた警官は若者五人を連行して
いった。

「大丈夫ですか？
ご主人？」

俺が、怪我を負った紳士の傍へ
駆け寄る。

「申し訳ない。
脇をかすっただけです。
大した傷ではありません」
「奥さん、お怪我は？」
「？？？」

なんや？
言葉が通じへんのか？

「ご主人。
何は、ともあれ傷の手当てを
せなあきませんで」
「いや。
本当に大したことはないので
大丈夫です」
「それやったら、わしらはその先
のハファダイに行く途中でした
よってそこで手当をしましょ。
場合によってはそこで救急車を
呼びましょか」
「申し訳ない」

Ｋｅｎが紳士に寄り添う
ように肩を貸す。
ハファダイは、日本で言うところ
のキャバクラの様な店である。
女がつくが彼女たちは、この店の
店員ではない。
客に酒をどんどん飲ませてそこ
から発生するチップをもらって
生活している。
また、交渉次第では夜の友にも
なってくれるらしい。

気がつけばエリーが駆けつけて
いた。

「大丈夫です。
脇をかすっていますが縫うほど

の大きな傷ではありません」

エリーが傷口を消毒しパッチを当てる。

ふと、紳士の背中を見ると立派な昇り竜を背負っている。

志水の叔父もご同業と見たようである。

一通りの手当が終わったところで紳士が口を開いた。

「この度は、火急のところ助太刀いただき誠にありがとうございました。

手前は、富士宮稲穂会伊達一家伊達龍二と申します。

よろしく、お見知りおきお頼み申します」

「早速のご挨拶、恐縮至極に存じます。

手前、吾妻組舎弟金山組預かり浜田雅美と申す若輩者でございます。

以後、よろしくお見知りおきのほどお頼み申し上げます」

お互い、稼業のものと感じたのであろう。

正式ではないが仁義を切り俺達は名乗りあった。

「伊達さん、堅苦しい挨拶は南国
Ｇｕａｍには似合いません。
お差し支えなければざっく
ばらんに参りませんか？」
「そうですな。
これは、失礼を致しました」

俺は、皆を伊達龍二に紹介し
ざっくばらんな会話に入って
いった。

「手前の嫁の菜穂美でござい
ます。
Ｇｕａｍには志水の叔父のお世話で
新婚旅行に参りました次第で」
「そうですか。
手前は、もめ事が一段落しま
したので嫁の真由美を連れて
昨日グァムに着いたところ
でした。
実は、嫁の真由美は耳が少し
不自由でして」
「ああ、そうでしたか。
それは気づきませんでした」
「ところで浜田さんは、なかなか
の猛者のようでらっしゃる」
「いやいや、伊達さんの方こそ。
あの、アホたれ共と対峙された
時の隙のなさ。

結構な修羅場をくぐっておいで
ではないですか？」

俺たちは、たちまち意気投合
した。
聞けば伊達は、５０歳。
志水の叔父と同い年のようで
ある。
元々ヘタレであった俺の話、
兄貴分を抗争で亡くし、その後
長の勤めに出ていた伊達の話。
話は尽きなかった。
伊達が唐突に言い出した。
「浜田さん。
日本から遠く離れたＧｕａｍの地で
こうしてお会いした。
これも何かのご縁。
しかも、わたしはあなたに助け
られた。
如何ですか？
ご迷惑でなければ兄弟の盃を
いただけませんか？」
「そんな、貫目も実力も上で
いらっしゃる方がこないな
ヘタレを捕まえて何を言いはり
ます？」

俺は、ちらりと志水の叔父の方へ
視線を流す。

「いや、伊達さん。
これも何かのご縁。
手前、志水が見届け人を勤めましょう」
「わかりました。
それでは、伊達さんのことをこれから兄貴と呼ばせていただきます」
「いや、浜田さん。
五分の盃で参りましょう。
手前は、あなたに男気を感じました。
ぜひ、五分の盃で」
「承知しました。
しかし、手前の方が若輩者。
五厘下がりでこの五厘を志水の叔父に預けると言うことで如何でしょうか？」
「手前に異存は、ありません。
志水の叔父貴よろしくお頼み申し上げます」

こうして俺は、遠くＧｕａｍの地で一生涯付き合いの続く伊達龍二と出会い、兄弟分の契りを結ぶこととなった。

――

「兄弟盃」

稼業の中においては、子分相互の間においても厳重な上下関係があります。
つまり、
「分違い（ぶちがい）」
と言って、渡世人社会における一種の人物的な重みの違い、則ち「貫目（かんめ）」の違いによって、上下的な関係が決まり、兄弟盃（的屋系では義兄弟盃）と言われる盃事によって、擬制の兄弟分となるわけです。
もっとも、最近では親子盃と同様に盃事を省略したり、盃事そのものを簡略にする場合も多くなっているようです。

この兄弟盃には2種があり、その1つが、組織内部における子分間相互の兄弟分の関係、もう1つが、他の組織との間に結ばれる兄弟分（出先の兄弟）関係です。
何れの場合も親分の許可を得た上で盃事を行います。
正式の盃事は、親子盃のように、吉日を選び、祭壇を設け、羽織、袴に威儀を正し、厳粛な雰囲気の中で古式に則って儀式を行い

ます。

ところで、一口に兄弟分と言いますが、その中身は

「五分の兄弟」

「五厘下りの兄弟」

「四分六の兄弟」

「七三の兄弟」

「二分八の兄弟」

に分かれており、その差が開くほど服従関係が強まります。

●五分の兄弟

最狭義の兄弟分のことで、上下関係なしの対等な関係にある兄弟分です。

お互いに「兄弟、兄弟」と呼び合います。

往時、この盃事では盃を中央に置き、紙で樋を2つ作り、この樋で同時にお神酒を飲んだと言われ、それに由来して

「飲み分けの兄弟」とも言います。

昨今では、盃を2個用い交盃します。

●五厘下りの兄弟

五分の兄弟と四分六の兄弟の中間で、４分５厘と５分５厘の関係にある兄弟のことです。
両者の間はごく僅かの差で座布団１枚をゆずる程度の差と言われています。
本来であれば五分同士であるが、何らかの事情で一方が遠慮して５厘だけ下り、その５厘を仲人に一時的に預け、仲人は後日機会をみて盃を改め五分の兄弟にするとされています。

●四分六の兄弟

兄分が６分、弟分が４分の差を持つ兄弟分です。
兄分は弟分を「兄弟」と呼び弟分は兄分を「兄貴」と呼びます。
尚、昨今では兄分が弟分を舎弟と呼ぶのが普通のようです。
盃事では、１個の盃に満たしたお神酒を兄分が６分まで飲み、残りを弟分に下げます。

●七三の兄弟、二分八の兄弟

兄分と弟分の差がそれぞれ7分3分と8分2分の関係にある兄弟分です。

盃事においては、盃に満たしたお神酒を、七三の兄弟の場合は兄分が7分まで、二分八の兄弟の場合は兄分が8分まで飲み弟分に下げます。

二分八の兄弟の場合は、兄弟と言うよりむしろ弟分は子分に近い関係であるため、兄分を「オヤジサン」と呼ぶこともあります。

出典、引用：

松江八束建設業暴力追放対策協議会ホームページ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

※この小説は、『フィクション』です。

実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。

著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第２９話「兄弟『紅蓮の龍』」

第２９話
「兄弟『紅蓮の龍』」

昨日の騒動、兄弟分の契り。
個人で始めた運送屋をそのまま
続けていたとしたら、俺はヘタレ
のまま人生を終えていたと思う。
しかし、ふとしたきっかけで俺の
人生の歯車は大きく動き始めた。
その日、その日を無難に過ごして
いく孤独な人生よりも菜穂美と
言う最愛の女と共に、そして兄弟
伊達龍二、義兄の金山修二と言う
家族以上の者達と過ごす人生。
これもまた人生ではないかと
考えれば人生の輝きと言うものが
やたらと眩しく感じるのは気の
せいだろうか？

俺は、事の次第を義兄に細大
漏らさずに報告していた。

「と言う次第で富士宮稲穂会伊達
一家の伊達龍二氏と兄弟分の契
りを結びました」
「ほぉ～。
富士宮稲穂会の伊達龍二言うた

ら『紅蓮の龍』言うて関東では
泣く子も黙る武闘派の最右翼、
富士宮稲穂会直参の中で最も
名の通った立派な人やで。
これは、わしらんとこの吾妻組
にとっても目出度いこっちゃ」
「勢いで、兄弟分などと言うて
まいましたが義兄さんにご迷惑
がかかったりせぇへんか、今に
なって冷や汗ですわぁ」
「いや、マサよ。
この縁組み大事にせぇよ。
場合によっちゃあ、わしなんか
の背中をおまえに見せるより、
よっぽどエエかもしれん。
なんべんも言うけどエエ人と
出会えたで。
おまえ、ヘタレや思とったけど
それ以上に強運があるみたいや
のぉ。
がははははは」

義兄はことのほかご機嫌だった。

「（♀）だ〜りん。
そろそろ準備せんと遅れるで。
せっかくの、ご招待も遅れたら
感じ悪いんとちゃう？」

さりげなく菜穂美が間に割って

入る。

「おお、ついつい義兄さんと長話
してしもたみたいやな。
義兄さん、兄弟から昼食の招待
受けとるんで報告は、この辺に
しときますわぁ」
「おぉ、そらすまんかった。
よろしゅう言うといてくれや。
ほしたらな」

電話が切れ、ＦＯＭＡが待受画面に
戻る。

俺達は、伊達の兄弟に昨日の礼に
昼食をとの招待を受けていた。
俺は、昨日できあがったばかりの
オーダーメードのアロハシャツに
白のスラックス、白のエナメル
シューズ。
手首には太いホワイトゴールドの
ブレスレットと菜穂美とペアの
ブルガリのウォッチをして盛大
めかし込んでいた。
アロハシャツは淡いスカーレット
ピンク地に白い柄で珊瑚礁と
シードラゴン（タツノオトシゴ）
をあしらっている。
ネービーカットの顔にレイバンの
ミラーサングラスをかける。

菜穂美のビーチドレスは、同じく
淡いスカーレットピンク地に
大きなオーキッド（洋蘭）の花が
散りばめてある。
顔には、シャネルのサングラス。
そして、ブルガリのペアウォッチ
をしている。。
俺たち二人が歩いていくと道行く
日本人カップルは驚いたように
道を開ける。
ジミーとＫｅｎを従えて、俺達は
伊達の兄弟の滞在する
ＨＩＬＴＯＮ　ＧＵＡＭ　ＲＥＳＯＲＴ　＆ａｍｐ；　ＳＰＡへと
リムジンを走らせた。
地理上は、お隣さんである。
炎天下を歩いていくのもいいが、
着くまでに汗だくになる。
車だと、汗もかかずにものの５分
足らずで着いてしまう。
俺は、ＨＩＬＴＯＮ　ＧＵＡＭ　ＲＥＳＯＲＴ＆ａｍｐ；　ＳＰＡ
へ着くまでの僅かの間にふと
感慨に浸る。
いくら五厘下がりの五分の兄弟と
言っても、こちらはヘタレを
ようよう卒業し、デビュー戦を
控えたルーキー（少々臺の立った
ルーキーではあるが）。
片や、数々の修羅場を潜り泣く子
も黙る「紅蓮の龍」と言う徒名を
持ち一家を構える直参の名のある

お方。
どう考えても釣り合わないように
思う。
しかし、そこのところは「男気」
の世界である。
ある意味、相手の熱い血に惚れる
と言うのは強ち間違いではないと
思う。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

にんきょう
　―けふ　【任侠／仁侠】
弱い者を助け、強い者をくじき、
義のためには命を惜しまないと
いう気風。
おとこぎ。おとこだて。

おとこーぎ
　をとこ―　【男気／侠気】
男らしい性質・気持ち。
自分の損得を顧みず弱い者のため
に力を貸す気性。
義侠心。侠気。

三省堂
　大辞林オンライン版より

――

※この小説は、『フィクション』です。
実在の場所を使用していますが登場人物、団体は、全て架空のものです。

☆この小説の著者は「わたし」です。
著作権は「わたし」にあります。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

第３０話「マサと龍二『侠気（おとこぎ）』」

第３０話
「マサと龍二『侠気』」

俺達の乗ったリムジンが
ＨＩＬＴＯＮ　ＧＵＡＭ　ＲＥＳＯＲＴ　＆ａｍｐ；　ＳＰＡの
車寄せに着く。
そこには、妻真由美を従えた
伊達の兄弟が両手を広げて待って
いた。

「いゃあ、兄弟。
お呼びだてして申し訳ない。
ようこそ、ヒルトンへ」
「これは、兄弟。
暑いのに玄関先で待っていて
くれはったんですか？」
「根がせっかちなもんでね。
そろそろ来る頃だなと見に出て
来たところさ。
ここの『ロイズラウンジ』は
うまい酒がたくさんある。
『ロイズレストラン』も昨日
食いに行ったけど、なかなか
旨い。
さあ、どうぞ」
「恐縮です。
さぁ、菜穂美行くで」

挨拶もそこそこに俺たちは空調の
よく効いたラウンジへと入って
いった。

「志水の叔父は、所用で失礼する
が、くれぐれもよろしくとの
ことです。
また、義兄の方からもくれぐれ
もよろしくと言うことです」
「叔父貴も一緒にと思ったが
お忙しそうでなによりだね。
そうかい、そりゃあご丁寧に。
兄弟、改めて俺の酒を受けて
くれるかい？」
「もちろん、喜んで受けさせて
いただきますよ」
「兄弟。
なんぼ叔父貴に五厘預けたと
言っても五分の兄弟。
堅苦しいのはなしにいこうぜ」
「ありがとうございます。
手前が勝手に言っていること
です。
せやから、気にせんといて
下さい」
「そうだ。
その関西弁がいいぞ。
標準語で言われるよりいい」

伊達の兄弟は、懐も深いさっぱりとした男のようだ。
改めて俺たちは、乾杯をした。
菜穂美が俺の左腕にさり気なく腕を絡めてくる。

「ところで、兄弟の奥さんは耳がご不自由やと聞きましたが？」
「そうなんだ。
妻と言っても2度目の妻なんだがね」

と、真由美に軽くウィンクを送る。

「よかったらお話聞かせて下さいませんか？」
「ああ。
自慢も何もないさ。
横須賀の駅前でチンピラに絡まれている女学生がいたと思いねぇ。
その女学生言葉が話せなくてチンピラが逆上しよってな。
あ、こら危ないと出て行ったのが知り合ったきっかけさ。
俺も面食らったよ。
手話で礼を言われてさ。
手話、わかるかい？
兄弟。

俺も生まれてこの方、手話
なんてものに縁がなくてさ、
その子に教えてもらうことに
なったのさ。
その教えてくれたのが、この
真由美ってわけよ」

俺に話をする間も伊達の兄弟は
妻真由美にも話がわかるように
手話を駆使していたのだった。

「極道が手話で女学生とデート
しているうちに、いつの間にか
こうなっちまったと言うわけ
でね」
「（♀）よいお話しを聞かせて
いただきました。
うちがこの人と知り合ったんは
出会い系サイトでした」

横から菜穂美が口を挟む。

「ほ〜。
それこそまた瓢箪から駒です
なぁ。
おっと、これは失礼」
「（♀）いえいえ。
かましません。
事実ですよって。
うちはね、この人のおかげで

シャブっちゅう地獄から這い
上がることができましてん」
「兄弟、一つ付け加えさして
もらいまっさ。
こいつ、こないなこと言います
けどシャブやりながらも人間
だけはやめへんかったんです
わぁ。
今では、よ～できた嫁で夫婦
漫才のええパートナーでっせ」

精悍な伊達の兄弟の顔がふと
優しくなった。

「そうだな。
男も女も収まるところに収まる
と、どちらも今までにない輝き
が生まれるんだな。
兄弟も菜穂美姐さんもそんな
輝きが見えるぜ」
「ああ、さすが伊達の兄弟。
ええこと聞かせてもらいまし
た。
ほんまに、その通りやと思い
ますわぁ」

何を思いだしたのか、菜穂美が
横で涙ぐんでいる。
真由美も龍二の手話で話の内容が
理解できるので涙ぐんでいる。

「こらぁ、菜穂美。
何、涙見せとんねん。
話が重うなるやないか
(涙声)」
「(♀)あんたかて泣いてる
やんか。
伊達はん、すんません」
「いやいや。
兄弟も菜穂美姐さんも二人は
結びつく運命だったと言うこと
だよ。
俺と真由美がそうであった
ようにね」

そう、運命の赤い糸。
幸運にも俺たちはその両端を
しっかりと掴んでいた。
多少の回り道はあったが。
「兄弟。
俺達、男というものは所詮
身勝手で孤独なもんだ。
それをしっかりと支えてくれる
女房がいる。
俺達は、幸せもんだよ。
真由美にも色々と苦労かけ
とるが、それは苦労ではないと
こいつは言う。
俺は、思うんだ。
人を愛すると言うのは相手の

ことを忘れてはいけないと
言う事だとね。
例え、どちらかが先に三途の
川を渡っても残された者は
愛する人のことを絶対に忘れず
いつまでも思い続けてやる。
それが愛だとね」

俺と菜穂美は、伊達龍二と言う
男の懐の深さ、人間の大きさに
触れることができたと感じた。
さすがに関東にこの人ありと
言われるだけのことがある。
俺でも、こんな大きな人間に
なることができるのか？
と今更ながら考えさせられた。

「伊達の兄弟。
わし、ほんまに兄弟と知り
合えてよかったですわぁ。
これからも色々と教えたって
下さい。
よろしゅうお頼み申します」
「教えるも何も、五分の兄弟と
言っただろう？
そんな、堅苦しいことは抜きで
お昼にしようぜ。
ここの料理はいけるんだぜ。
な？
真由美？」

微笑みながら、真由美が頷く。
俺たちは、ロイズラウンジを出て
ロイズレストランへと向かった。

～第2章
「横須賀ベイブルース」へ
・・・つづく。
To be continue

※この小説は、『フィクション』
です。
実在の場所を使用していますが
登場人物、団体は、全て架空の
ものです。

☆この小説の著者は「わたし」
です。
著作権は「わたし」にあり
ます。

頼光（らいこう）　雅（みやび）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4546d/

素浪人　青龍～Blue Dragon【第１章】『稼業への扉』

2010年10月10日07時10分発行